三重県埋蔵文化財調査報告２９０－２

丁長遺跡（第２次）発掘調査報告

２００７年　１２月

三重県埋蔵文化財センター

ＳＥ60出土木札

序

多気郡明和町は、三重県内を北流する櫛田川と宮川によって挟まれた洪積台地に位置し、国史跡斎宮跡をはじめとする歴史的遺産が数多く存在します。

今回発掘調査を行いました丁長遺跡は、明和町のほぼ中央部を流れる笹笛川左岸に位置し、平成18年度総合河川流域防災事業二級河川笹笛川に伴って発掘調査を実施したものです。当遺跡の発掘調査は平成１８年度国営宮川用水第二期土地改良事業に伴う調査に続いて２度目になります。第１次調査では、古代官道と考えられる道路遺構をはじめ、中世の溝・土坑など多数の遺構とそれらに伴う遺物が確認されました。今回の調査では、第１次調査で確認された溝の続きのほか、井戸や土坑などが見つかりました。これらの発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお、調査にあたっては、地元の方々をはじめ、明和町、および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に、心から御礼申し上げます。

２００７年１２月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉　水　康　夫

例　　言

1．本書は三重県多気郡明和町斎宮字丁長・上横田に所在する丁長遺跡の第２次発掘調査にかかる報告書である。

2．本遺跡の調査は、平成18年度総合河川流域防災事業二級河川笹笛川に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部河川室から経費の執行委任を受けて実施した。

3．調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ｉ課

技師　野嶌美沙子　・　技術補助員　小林俊之

土工委託　　有限会社技建志登茂

面　　積　　1,400㎡

期　　間　　平成18年５月16日～平成18年７月24日

4．調査に当たっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部河川室・松阪建設事務所事業推進室整備２課・明和町からの協力を得た。

5．本書の執筆・編集は野嶌美沙子・小林俊之が行い、執筆分担については文末に記入した。なお、室内整理作業、図面作成等は調査担当者と支援研究課が行った。

6．現地の調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々にご指導・ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。

榎村寛之（斎宮歴史博物館）・岡本広義（財団法人元興寺文化財研究所）

木沢直子（財団法人元興寺文化財研究所）・小林秀（三重県生活部文化振興室県史編さんG）

西畑良芳（金峯山修験本宗総本山金峯山寺）・藤澤良祐（愛知学院大学）

明和町・三重県県土整備部河川室・三重県松阪地方県民局建設部事業推進室

7．ＳＥ60出土の木札について樹種同定、墨書判読および赤外線写真撮影、斜光写真撮影を財団法人元興寺文化財研究所に依頼し、その成果をⅣ章、Ⅴ章に掲載した。また、写真については巻頭カラーおよび写真図版８～９に掲載した。

また、ＳＥ60出土木製品（井戸側）の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに依頼し、その成果をⅤ章に掲載し、写真については写真図版10に掲載した。

8．調査は、国土座標第Ⅵ系（日本測地系）の座標軸に準拠して行い、当報告もそれに拠って記述している。従って本書で示す北は、国土座標第Ⅵ系の座標北を用いている。なお、世界測地系の座標値については、（　）内に併記している（小数点第３位以下は四捨五入）。

9．本報告書での遺構番号は第１次調査からの通番となっている（51から）が、第１次調査において検出された遺構と同一の遺構は第１次調査時に使用された番号を用いている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。ただし、ピットは小地区毎に１から番号を付与しているため、略号の前に小地区を記入している。

ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＺ：不明遺構　　Ｐ：ピット

10．本書では、土層及び遺物の色調について小山・竹原編『新版標準土色帖』（14版1994）を使用した。

11．本書で報告した記録・遺物等は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

目　　　次

Ⅰ　前　　　言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Ⅲ　遺　　　構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
Ⅳ　遺　　　物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Ⅴ　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
Ⅵ　結　　　語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

挿 図 目 次

Ⅰ　前　　言
第１図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２図　調査区地区割図・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅱ　位置と環境
第３図　遺跡周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第４図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Ⅲ　遺　　構
第５図　Ⅰ区遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第６図　Ⅱ区遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第７図　Ⅰ区西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・8
第８図　Ⅱ区土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第９図　SD24・36・39・57実測図・・・・・・・・・・・9
第10図　SD37・52実測図・・・・・・・・・・・・・・・・9
第11図　SD53実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第12図　SD55・SK54実測図 ・・・・・・・・・・・・・・10
第13図　SE51実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第14図　SZ58・ピット群実測図 ・・・・・・・・・・・・11
第15図　SD59・61・62実測図　・・・・・・・・・・・12
第16図　SE60実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Ⅳ　遺　　物
第17図　出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・15
第18図　SE60出土井戸側材実測図 ・・・・・・・・・・17
第19図　SE60出土井戸側材・息抜筒実測図 ・・・・・18
第20図　SE60出土木札実測図 ・・・・・・・・・・・・19
Ⅵ　結　　語
第21図　第１次・第２次調査検出溝群
　　　　平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第22図　丁長遺跡検出溝群と条里の関係 ・・・・・・25

写真図版目次

巻頭写真１　SE60出土木札
写真図版１　調査前風景・Ⅰ区全景 ・・・・・・・・・29
写真図版２　Ⅰ区南半部・SE51半裁状況 ・・・・・・30
写真図版３　Ⅱ区全景・SD62 ・・・・・・・・・・・・31
写真図版４　SE60木札出土状況・SE60井戸側
　　　　　　検出状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・32
写真図版５　作業風景・調査終了後状況 ・・・・・・33
写真図版６　出土遺物写真 ・・・・・・・・・・・・・34
写真図版７　SE60出土遺物写真① ・・・・・・・・・・35
写真図版８　SE60出土遺物写真② ・・・・・・・・・・36
写真図版９　SE60出土遺物写真③・SE60出土
　　　　　　木札の光学顕微鏡写真 ・・・・・・・・・37
写真図版10　SE60出土井戸側材の光学顕微鏡
　　　　　　写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

表　目　次

Ⅲ　遺　　構
第１表　遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Ⅳ　遺　　物
第２表　出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・20
第３表　SE60出土木製品観察表 ・・・・・・・・・・・21
Ⅴ　自然科学分析
第４表　樹種同定結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・22

Ⅰ　前　言

1　調査に至る契機

丁長遺跡は多気郡明和町斎宮字丁長・上横田に所在する。この遺跡は国史跡斎宮跡の東方に位置し、古代伊勢道の延長部にあたる可能性が高かった。このため、平成17年度宮川用水第二期土地改良事業に伴って、範囲確認調査が行われた。その結果、近鉄線の南側事業地内北端部において古代道路の側溝と考えられる並行する２条の溝が検出され、丁長遺跡として新規登録された。これを受けて平成18年４月10日～同年６月７日にかけて本調査（第１次調査）が実施された。

今回の発掘調査（第２次調査）は平成18年度総合河川流域防災事業二級河川笹笛川に伴い実施した。調査に先立ち平成18年３月29日～３月31日に範囲確認調査を行った。調査は3,200㎡を対象にトレンチ状の確認坑を設定して行った。その結果1,400㎡について遺構が存在しているものと判断した。

これを受けて関係部局と協議を重ねた。その結果、現状保存が困難であるとして発掘調査(第２次調査)を実施し、記録保存を図ることになった。

2　調査の方法

（１）調査区名

平成18年３月に行われた範囲確認調査の結果、遺構の存在は南側1,000㎡、北側400㎡の二箇所に分かれていることが確認された。従って、南側の調査区をⅠ区、北側の調査区をⅡ区とした。

Ⅰ区は第１次調査に設定された最も北側の調査区（Ｄ地区）と接しており、第１次調査で検出された溝群の延長部がⅠ区においても確認されることが想定された。

（２）地区割

地区割については国土座標（日本測地系）を基に第１次調査において設定された地区割を北側へ延長したものを利用している。第１次調査では大地区として100m方眼を設置し、南からＡ～Ｄ地区としている。さらに、４m方眼で小地区を設定している。従って、第２次調査ではこの地区割を踏襲し、Ⅰ区はＥ地区、Ⅱ区はＦ地区に相当した。なお、小地区については北から南にＡ～Ｙ、西から東に１～15を配置した。

（３）遺構図面

調査区全体の平面図は縮尺１/50、各土層断面図は縮尺１/20手書き実測を行った。また、各遺構の詳細な実測図が必要なものについては縮尺１/10手書き実測を行った。

3　調査の経過

（１）調査経過概要

調査区の現況は水田で、耕作土と水田の床土等遺構面までを重機で除去し、人力により遺構の検出、掘削を行った。作業に参加していただいたのは、明和町在住の方々である。心から感謝いたします。

（２）調査作業日誌（抄）

調査の経過に関しては以下の通りである。

2006年

５月17日	現地協議。
５月25日	Ⅰ区表土掘削開始。
５月26日	Ⅱ区表土掘削開始。
６月１日	Ⅰ区人力掘削開始。
６月20日	Ⅰ区遺構掘削終了。Ⅱ区遺構検出開始。
６月21日	Ⅱ区遺構掘削開始。ＳＤ62は調査区のさらに北側へ続くと思われるが、協議の結果、遺物が全くなく、拡張の必要はないと判断。
６月28日	ＳＥ60井戸側を検出。
６月29日	Ⅰ区、Ⅱ区調査区全景写真撮影。
７月３日	遺構実測開始。
７月６日	ＳＥ60井戸側内を半裁。北西隅木の上から木札出土。井戸側の実測。
７月７日	ＳＥ60写真撮影後、井戸側取り上げ。
７月10日	ＳＥ60、ＳＺ58断割。Ⅱ区下層確認。
７月11日	ＳＥ51断割。Ⅰ区下層確認。
７月15日	埋戻終了。引渡し。

（３）工事立会調査

本調査終了後、平成19年1月31日にⅡ区のさらに北側の地点において工事立会調査が行われた。調査面積は30.0㎡であったが、遺構・遺物ともに確認されておらず、工事立会調査地は遺跡の範囲外にあたる可能性が高いことが確認された。

（４）文化財保護法等にかかる諸通知

本調査にかかる関係法令の諸通知は、以下により行っている。

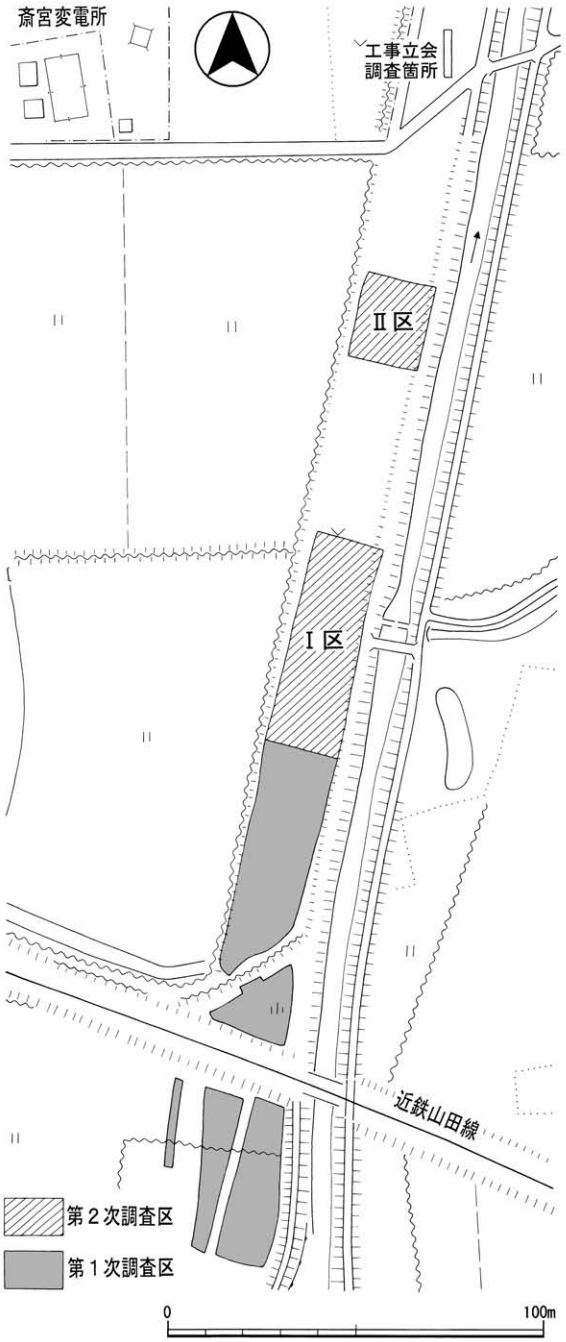
・発掘調査の実施報告（文化財保護法99条第１項、埋蔵文化財センター所長→県教育長）

平成18年５月17日付け　教埋77号

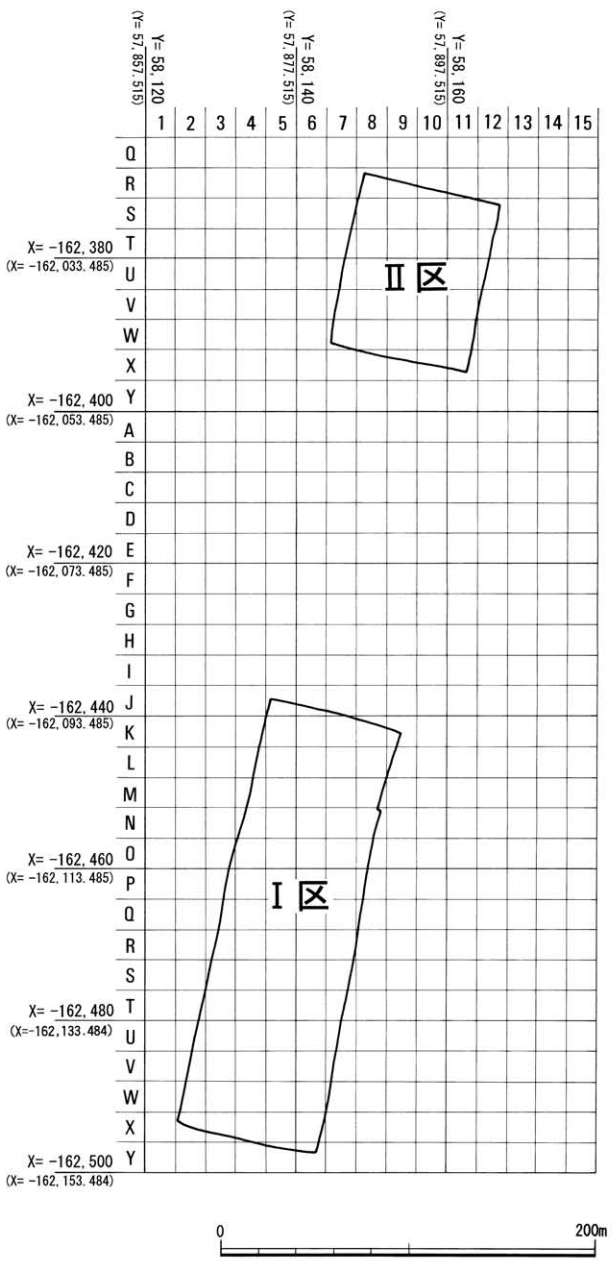
・文化財発見・認定通知（遺失物法、県教育長→松阪警察署長）

平成18年８月３日付け　教委第12－４－４号

（野嶌　美沙子）



第１図　調査区位置図（１：2,000）
〔明和町都市計画図　１：2,500より作成〕



第２図　調査区地区割図（１：1,000）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

丁長遺跡(１)は、多気郡明和町斎宮字丁長・上横田に位置する。このように、調査地は大字「斎宮」の内に含まれているが、著名な遺跡である史跡斎宮跡の範囲外である。斎宮跡の東端より東方約600mの地点にあたる。

明和町の主要部は台地上にあるが、丁長遺跡は台地間にある谷底平野に立地する。標高は約７mである。

調査区の東には笹笛川が北流する。笹笛川は明和町内を流れる全長約12㎞の小規模な河川で、調査区周辺は昭和前半期の河川改修のため直線的な流れとなっている[①]。

2　歴史的環境

周辺遺跡についての概要は、斎宮跡の報告書等[②]で述べられているため、そちらを参照されたい。この節では、丁長遺跡に関わる古代～中世の周辺環境のみ触れておきたい。

(１) 丁長遺跡

丁長遺跡の第１次調査は、第２次と同じ平成18年度に発掘調査された。近鉄線以南の調査区では、古代の伊勢道と想定される遺構が検出されている。伊勢道は、斎宮を経由して伊勢神宮へ向かうものであり、これを基に近世の伊勢街道(参宮街道)も成立する。後述のように、斎宮跡の地内には奈良時代の古道の場所が推定されており、丁長遺跡第1次調査ではその延長が確認された。

近鉄線以北の調査区(第２次調査区隣接地点)では鎌倉時代の溝が数条検出されており、このうち数条は第２次調査区方面へ伸びる。また、木葉形尖頭器や磨製石斧などの石器も出土している[③]。

(２) 国史跡斎宮跡

周辺の遺跡で最も著名な遺跡に国史跡斎宮跡(２)がある。斎宮は、斎王の御所と事務運営を司る役所(斎宮寮と呼ばれた令外官)の総称である。斎王は、天皇に代わって伊勢神宮に奉祀するため伊勢に遣わされた未婚の内親王または女王のことである。斎王は天武天皇の皇女大来を最初の確実な斎王とし、以後、後醍醐天皇の斎王祥子内親王まで約660年間続いている。

斎宮跡では，昭和45年の発掘調査開始以来、毎年多くの調査成果を挙げており、斎宮の全容が明らかになりつつある。

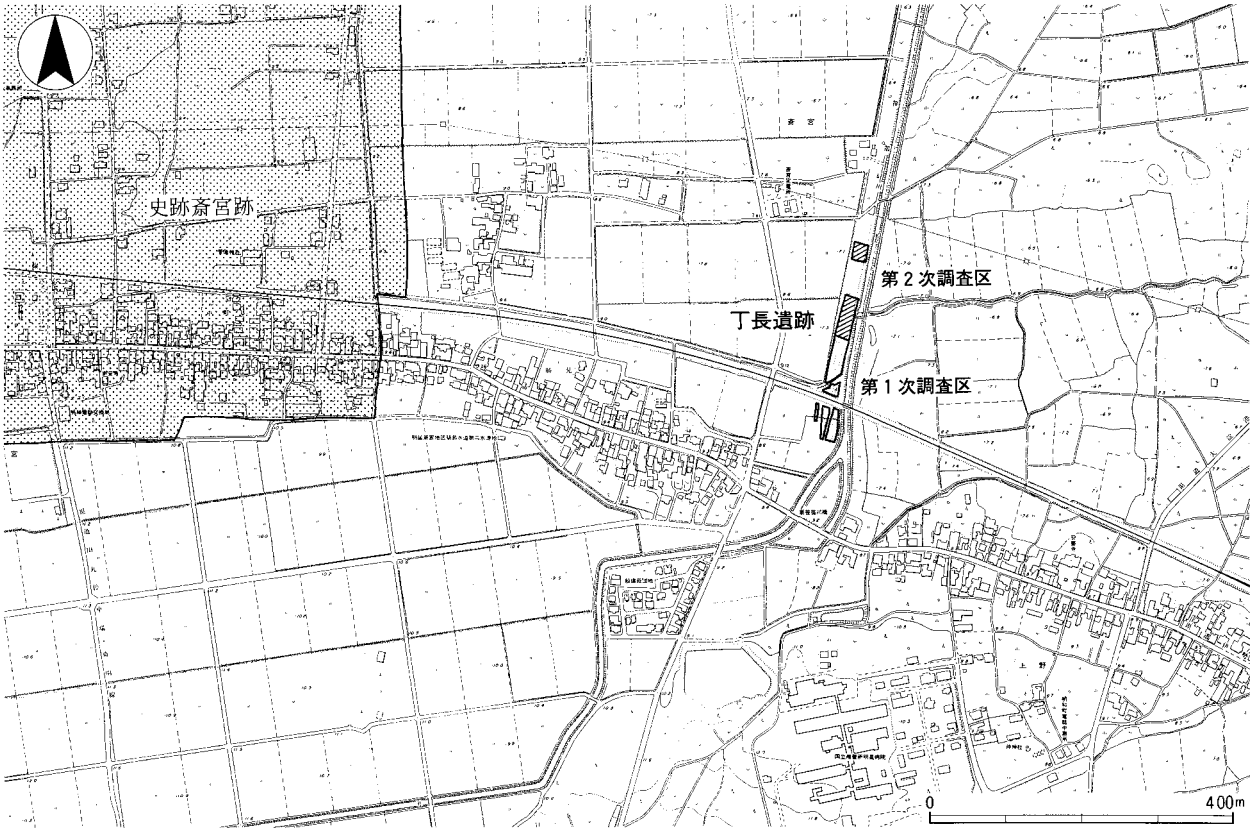
斎宮の範囲については、およそ東西２㎞、南北700mである。祓川を西端に斎宮台地の上に展開しており、この内部では奈良時代の古道、平安時代の方格地割、鎌倉時代の大溝等が確認されている。飛鳥～奈良時代には遺跡西部に、奈良時代後半～平安時代前半には中央部から東部に、平安時代中頃～末期には中央部に、そして鎌倉時代には再び西部に遺構・遺物が集中し、斎宮の中心が移動することが考えられている。また、現在の竹神社東では、大規模な二重の柵が検出されており、この区画が内院にあたると想定されている[④]。

前述のとおり、この斎宮跡は、丁長遺跡とは約600mしか離れていない至近距離であるため、丁長遺跡を考える際にはきわめて重要な遺跡である。

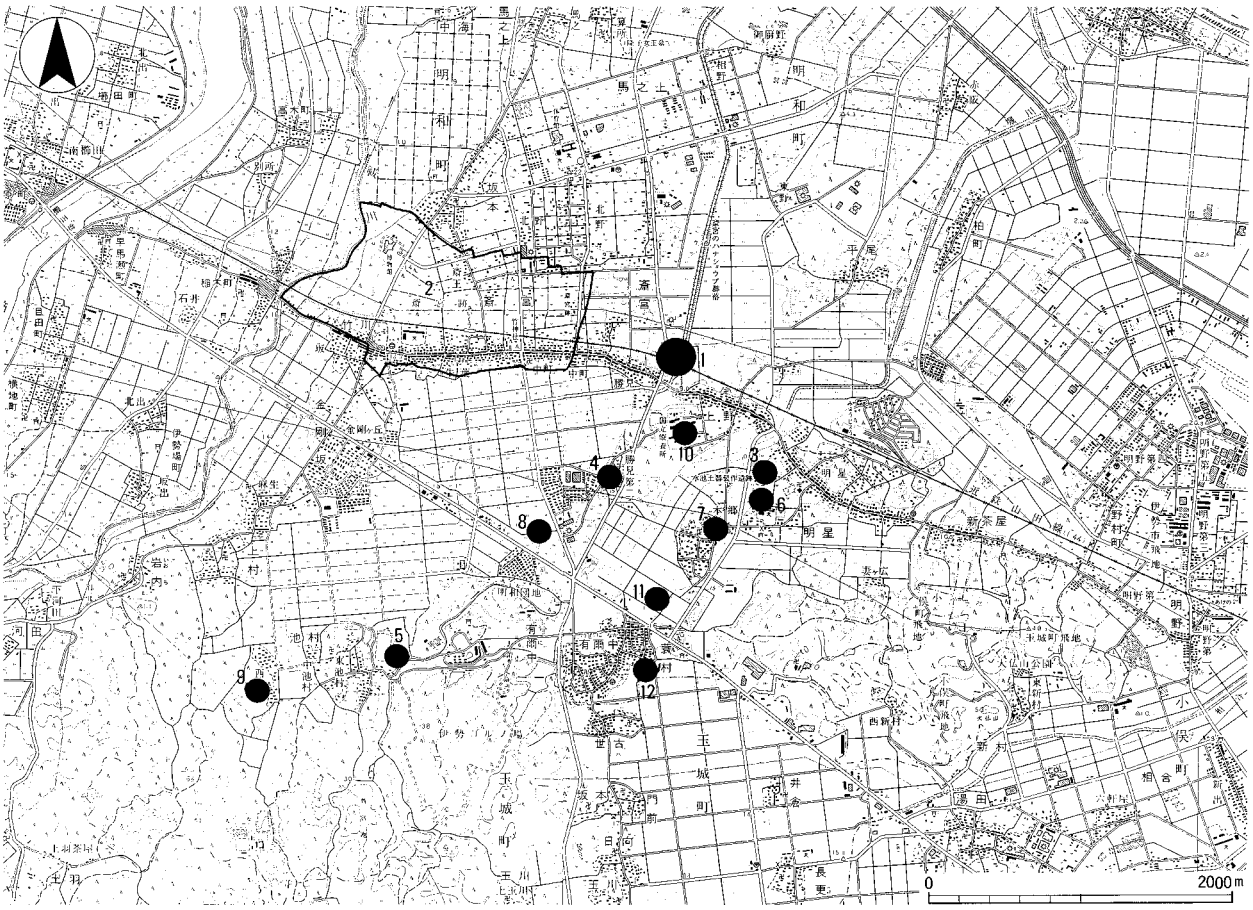
(３) 他の遺跡

当遺跡周辺には斎宮跡以外にも多くの遺跡が存在する。特に、明和町から玉城町にかけての「有爾郷」では土師器を製作していた遺跡がある。有爾郷は、古代より伊勢神宮の神事に用いる「神宮御料土器」を作り続けてきた所としてよく知られている。この有爾郷内では、国史跡水池土器製作遺跡(３)をはじめ、北野遺跡(４)など20遺跡で土師器焼成坑が検出されている。

水池土器製作遺跡は、現在史跡公園として整備されており、焼成坑のほか工房であろう掘立柱建物跡などが検出されている[⑤]。北野遺跡では、６世紀前半から８世紀前半までの土師器焼成坑が225基も検出されている[⑥]。戸峯Ａ・Ｂ遺跡(５)では100基の土師器焼成坑が検出されている[⑦]。



第３図　遺跡周辺地形図（１：10,000）〔明和町都市計画図　１：2,500より作成〕



第４図　周辺遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院「松阪」「明野」　１：25,000より作成〕

平安時代以降については、遺構が減少するものの、黒土遺跡（６）で平安時代末の土器焼成に関連すると考えられる遺構が検出されていたり⑧、本郷遺跡（７）や堀田遺跡（８）では土師器生産に関わる可能性がある土製支脚が出土しているため⑨、連綿と土師器生産が行われていたことがわかる。史料上でも、中世において土器生産に関わる「有尓」の名が見られるようになる。しかし、古代と中世の間に断絶があったことも明らかにされている⑩。このほかでは、本郷遺跡で16世紀代に城郭遺構が築かれており、有爾御器長との関連性も指摘されている⑪。

集落遺跡では、本郷遺跡で12世紀後半頃を中心とする掘立柱建物等が見つかっている⑫。また、愛場遺跡（９）では12～13世紀代の掘立柱建物や溝、井戸が検出されている⑬。斎宮跡でも斎宮廃絶後の中世集落としての遺構が検出されている⑭。

ほかこの付近には、室町時代には室町幕府の祈願所だった安養寺跡(10)がある。当時は伊勢国内で有数の寺院だったらしく、伊勢国司北畠氏の保護も受けていたようである⑮。安養寺の成立時期ははっきりしていないが、寺伝によると永仁５年(1297)とされている。発掘調査では、15世紀中葉～16世紀後葉の多くの遺構・遺物が確認されている。寺域をめぐる幅４～５m、深さ２～３mの堀も確認されており、寺域の東西幅は約170mであったことがわかっている。また、明治期の地籍図によって南北幅も約200mであったことが推定されている⑯。

（小林　俊之）

〔註〕

①『明和町史』史料編第一巻－自然・考古－（明和町、2004年）。

②『明和町史』史料編第一巻－自然・考古－（明和町、2004年）。
『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ内院地区の調査』（斎宮歴史博物館、2001年）。
その他概要報告書等も参照されたい。

③『丁長遺跡発掘調査速報(現説資料)』（三重県埋蔵文化財センター、2006年）。

④『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ内院地区の調査』（斎宮歴史博物館、2001年）。
『明和町史』斎宮編（明和町、2005年）。
吉水康夫「斎宮跡の古代道路」（『季刊考古学』46、雄山閣、1994年）。

⑤ 三重県教育委員会「水池土器製作址」（『斎王宮阯－広域市町村圏道路調査－』（明和町教育委員会・三重県教育委員会、1977年）。

⑥三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告』(1995年)。
三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡第5次発掘調査概報』(1996年)。

⑦明和町教育委員会『戸峯Ａ遺跡調査概要』(1991年)。

⑧三重県教育委員会『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』(1989年)。

⑨三重県埋蔵文化財センター「本郷遺跡(第2次)」（『本郷遺跡(第２次)・曲里中遺跡』1992年)。
三重県教育委員会「堀田遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』、1981年)。

⑩小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態～伊勢国有尓郷を素材として～」（『研究紀要』第１号、三重県埋蔵文化財センター、1992年)。

⑪三重県埋蔵文化財センター「本郷遺跡(第２次)」（『本郷遺跡(第２次)・曲里中遺跡』1992年)。

⑫前掲⑪文献。

⑬三重県教育委員会『西村遺跡・愛場遺跡』（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1983年)。

⑭伊藤裕偉「斎宮の中世的展開」（『明和町史』斎宮編（明和町、2005年)。

⑮「北畠教具御教書(安養寺文書)」等（『明和町史』史料編第二巻文書史料、明和町、2006年)。

⑯中野敦夫「安養寺跡」（『明和町史』史料編第一巻－自然・考古－、明和町、2004年)。
『北畠氏とその時代』(第25回三重県埋蔵文化財展図録、三重県埋蔵文化財センター、2006年)。

Ⅲ　遺　構

1　Ⅰ区

（1）基本層序

基本的には、上から表土（灰黄褐色土・10YR4/2)、耕作土（暗褐色土・10YR3/4)、床土（にぶい赤褐色土・5YR5/4)、遺構検出面および地山（黄橙色土・10YR7/8）である。また、遺構検出面の直下は確認できていないが、後述するＳＺ58の直下から灰白色砂（2.5Y8/1）や灰白色砂礫（5Y8/1）など、砂層や砂礫層が確認されている。遺構検出面以下の土層には遺物等は含まれておらず、地山と考えられる。

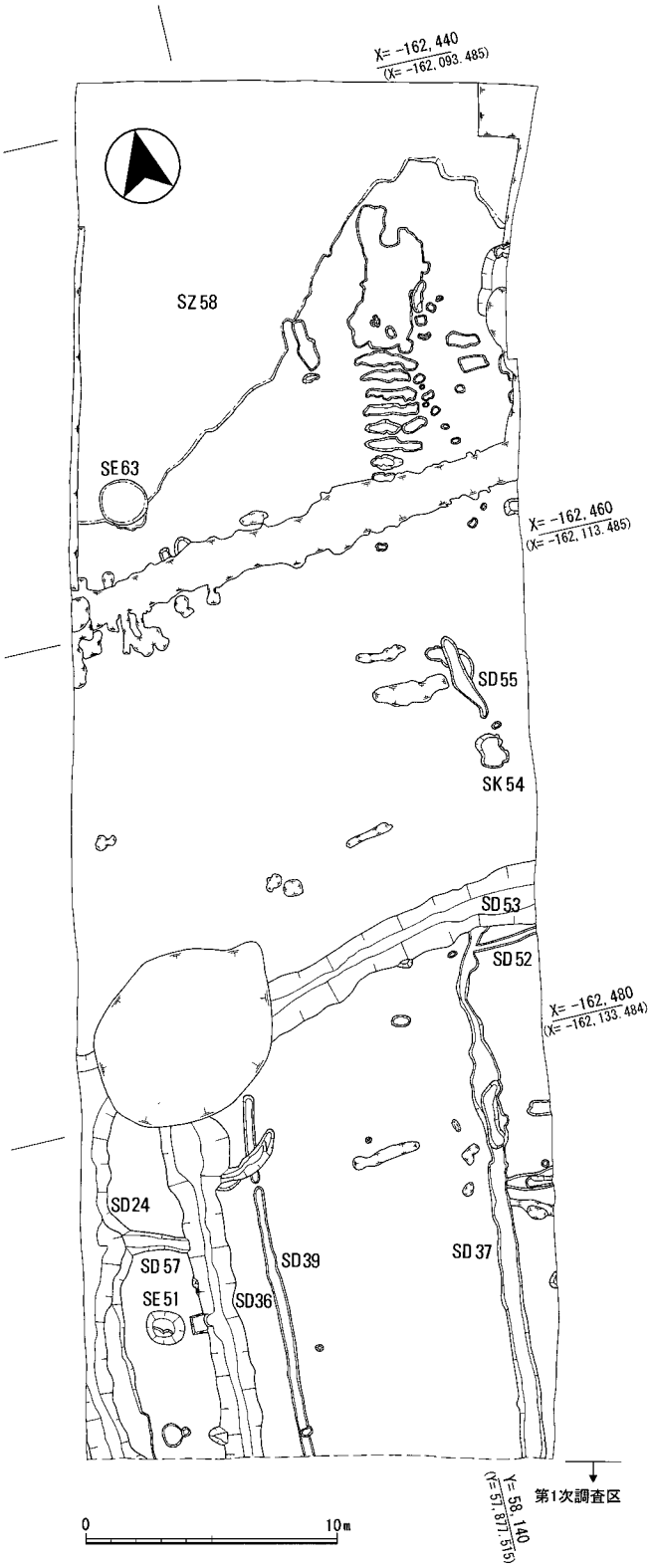
（2）平安時代末期の遺構

溝ＳＤ３７　調査区南東部Ｓ12～Ｙ11区で検出した。第１次調査で検出された溝の延長部で、長さ約22m、幅0.4～1.2m、深さ0.17mである。方位はおよそＮ６°Ｅであるが、第１次調査検出部はおよそN15°Ｅである。ＳＤ24・ＳＤ36・ＳＤ39とほぼ並行するが、ＳＤ37のみ調査区の東部に位置し、他の南北に延びる溝からはやや離れている。出土遺物は非常に少ないが、古代の土師器甕の破片が出土している[①]。ただし、第１次調査では平安時代末期以降の遺構として捉えられている[②]。

（3）鎌倉時代の遺構

溝ＳＤ２４　Ｔ７～Ｘ７区で検出した。第１次調査で検出された溝の延長である。調査区西際で検出したため、幅は不明だが、長さ約17m、深さ0.69mである。第１次調査検出部をあわせると方位はおよそＮ２°Ｗである。北端の一部は撹乱に切られるが、調査区外西側へ延びていくようである。ただし、西壁断面のＳＤ24埋土のうち、北側の部分は後述するＳＤ53の埋土である可能性もある。埋土最下層には粗砂層が見られ、遺構の肩ではえぐられたような痕跡も認められることから、水が流れていた可能性が高い。出土遺物は小片ばかりだが、13世紀前半に属する南伊勢系の土師器皿[③]を確認している。

溝ＳＤ３６　ＳＤ24と同様、第１次調査で検出された溝の延長部であり、Ｕ８～Ｘ８区で検出した。北端部は後世に撹乱されており、その撹乱より北側へは続かない。規模は長さ約14m、幅1.7m、深さ0.96mである。断面形はU字形である。第１次調査検出部をあわせると方位はおよそＮ２°Ｅで、ＳＤ24と概ね並行する。形状も類似していることから、



第５図　Ⅰ区遺構平面図（１：300）

何らかの関係のもと掘削された可能性がある。下層から14世紀後半まで下る南伊勢系の土師器皿が出土している。従って、鎌倉時代後半から室町時代初頭の遺構と考えられよう。

溝ＳＤ５３　調査区東部Ｔ９～Ｓ12区で検出した東西に延びる溝である。規模は長さ約12m、幅約２m、深さ0.73mである。断面形はU字形に近い。方位はおよそＥ10°Ｎであり、南北に延びるＳＤ24・ＳＤ36とは直交しない。西への延長については、西壁断面のＳＤ24埋土北側の土層が不明瞭であり、さらにＳＤ24・ＳＤ36と交わると思われる箇所に大きな撹乱が存在するため、残念ながら不明である。従って、撹乱内で終息するかＳＤ24に連結する、もしくは調査区西側へさらに延長するという３つの可能性があろう（第５図）。埋土から13世紀末～14世紀中頃と考えられる南伊勢系の土師器皿が出土している。

溝ＳＤ５７　ＳＤ24とＳＤ36をつなぐように検出された東西に延びる小さな溝である。規模は長さ2.6m、幅0.6～0.9m、深さ0.36mである。平面では切りあいが不明瞭であったが、サブトレンチを設定して確認した結果、ＳＤ24・ＳＤ36に先行することが確認された。他にも東西に延びる小さな溝状遺構が確認されたが、その性格については不明である。出土遺物は非常に少なく詳細不明だが、ＳＤ24とＳＤ36との関係から鎌倉時代以前の遺構と考えられる。

溝ＳＤ５５　Q12区で検出した南北に延びる小さな溝状遺構である。規模は長さ3.7m、幅0.6mで深さは0.14mと浅い。鎌倉時代以前と思われる土師器小片が出土している。

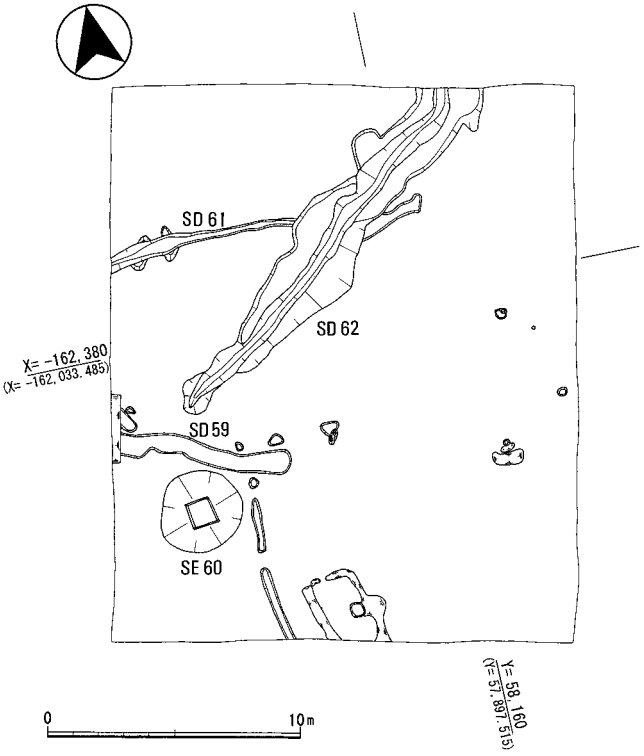
井戸ＳＥ５１　調査区南西部Ｗ８区で検出した井戸で、ＳＤ24とＳＤ36の間に位置している。規模は長径1.6m、短径1.4mで、楕円形である。確認面から深さ約2.5mである。底まで確認できたが、枠材等の出土はなく、土層断面でも掘り形状のものは確認できなかったため、素掘りであると考えられる。しかし、最底部には段が認められるため、曲物等を据えていた可能性がある。なお、第13図の４層以下は明瞭な分層ができなかったため１層表記だが、さらに分層できた可能性もある。出土遺物は破片のみであるが、陶器椀、いわゆる山茶椀が下層から出土している。このことから遺構の埋没時期を13世紀前半の時期に求めることができよう[4]。また、木片が数点出土したが、加工痕の見られるものはなかった。

土坑ＳＫ５４　調査区東部Ｒ12区で検出した。規模は長径約1.4m、短径約1.1m、深さ約0.11mである。埋土は黒褐色土であり、地山とは明らかに異なるが、輪郭が不明瞭であった。また、周辺には風倒木によると思われる撹乱が多数確認されており、ＳＫ54も確実な遺構であるとは言いがたい。鎌倉時代以前と思われる土師器小片が出土している。

不明遺構ＳＺ５８　調査区北端部に広がる遺構である。調査区北西部で先行トレンチをあけたところ、深さ0.6mあたりで砂層が薄く検出され、その下からはすぐに砂礫層が検出された。深さ0.8mまで掘削したが、砂礫層以下からは遺物は出土していない。これらのことから、川もしくは沼の痕跡の可能性が考えられる。出土遺物は古代の土師器小片が多いが、陶器小皿の小片が出土しており、鎌倉時代の所産と判断した。

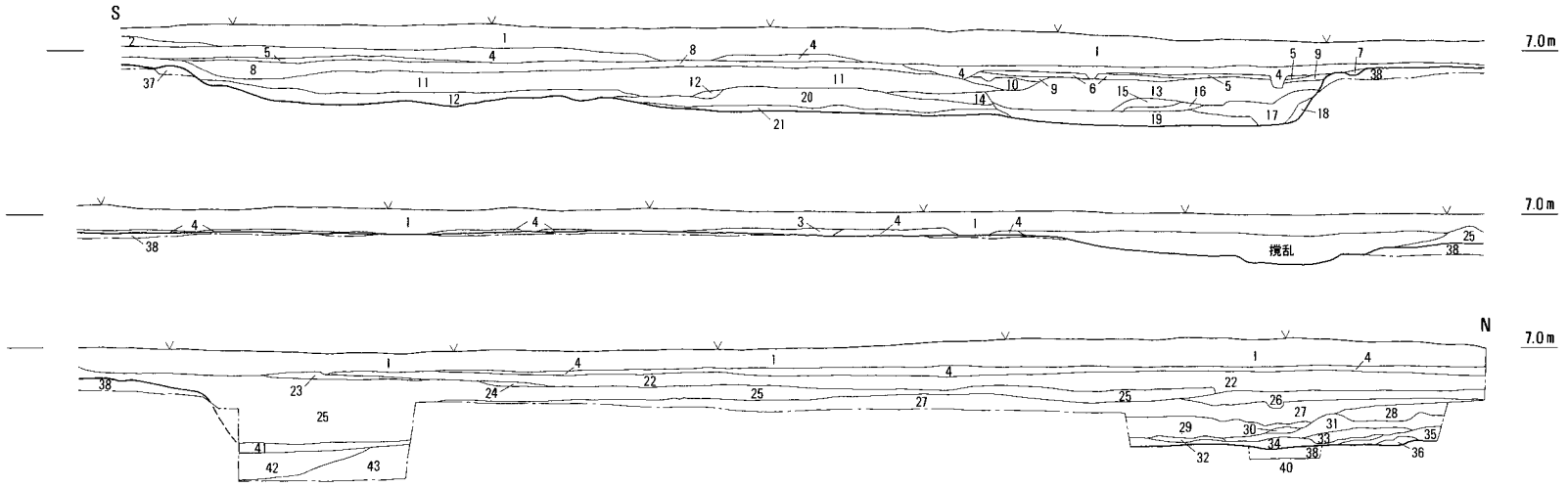
（４）江戸時代の遺構

溝ＳＤ５２　調査区東部Ｔ12区で検出した東西に延びる小さな溝で、ＳＤ37を切っている。長さ2.6m、幅0.3mである。陶器片が出土しており、江



第６図　Ⅱ区遺構平面図（１：300）

第７図　Ⅰ区西壁土層断面図（１：100）

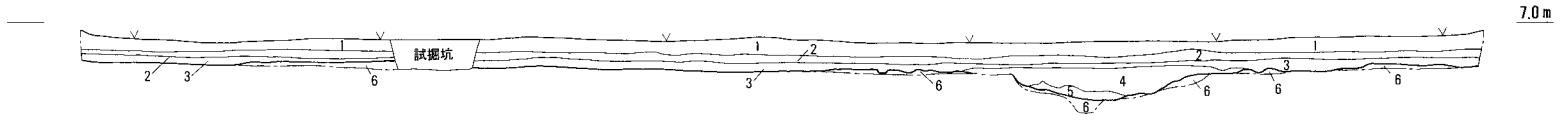


1 灰黄褐色土（10YR4/2・表土）
2 黒褐色土（2.5Y3/2・耕作土）
3 黄灰色土（2.5Y6/1・耕作土）
4 暗褐色土（10YR3/4・耕作土）
5 にぶい赤褐色土（5YR5/4・床土）
6 暗赤褐色土（5YR3/2・床土）
7 褐灰色土（10YR4/1）
8 黒褐色土（5YR3/1・SD24埋土）
9 黒褐色土（7.5YR3/1・SD24埋土）
10 褐灰色砂質土（7.5YR5/1・SD24埋土）
11 黒褐色土（2.5Y3/2・SD24埋土）
12 褐灰色粘質土（7.5YR4/1・SD24埋土）
13 黒色粘質土（10YR5/1・SD24or53埋土）
14 黒褐色砂質土（10YR3/1・SD24埋土）
15 褐灰色粘土（10YR5/1・SD24or53埋土）
16 褐灰色粘質土（7.5YR4/1・SD24or53埋土）
17 褐灰色粘土（7.5YR5/1・SD24or53埋土）
18 黒褐色粘質土（7.5YR3/1・SD24or53埋土）
19 黒色砂質土（7.5YR2/1・SD24or53埋土）
20 褐灰色砂質土（10YR4/1・SD24埋土）
21 暗灰黄色砂（2.5Y5/2・SD24埋土）
22 褐灰色粘土（7.5YR4/1・SZ58埋土）
23 明褐色土（7.5YR5/6・SZ58埋土）
24 黒褐色粘土（10YR3/1・SZ58埋土）
25 褐色粘土（7.5YR4/3・SZ58埋土）
26 橙色粘土（7.5YR6/8・SZ58埋土）
27 褐灰色粘土（7.5YR4/1・SZ58埋土）
28 橙色粘質土（7.5YR6/8・SZ58埋土）
29 褐灰色砂質土（7.5YR4/1・SZ58埋土）
30 褐灰色砂質土（10YR5/1・SZ58埋土）
31 暗灰色粘土（N3/0・SZ58埋土）
32 灰色粘土（N4/0・SZ58埋土）
33 褐灰色粘土（10YR4/1・SZ58埋土）
34 灰白色粘土（7.5YR8/1・SZ58埋土）
35 黄灰色砂（2.5Y6/1・SZ58埋土）
36 灰色砂（N4/0・SZ58埋土）
37 灰褐色土（5YR5/2・地山）
38 黄橙色土（10YR7/8・遺構面＝地山）
39 灰白色砂（2.5Y8/1・地山）
40 灰白色砂礫（5Y8/1・地山）
41 灰白色粘土（2.5Y7/1・地山？）
42 明青灰色シルト（10BG7/1・地山）
43 明黄褐色砂礫（10YR6/8・地山）

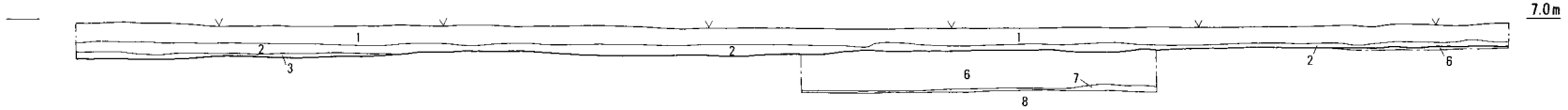
0　4m

第８図　Ⅱ区土層断面図（１：100）

〔北壁〕

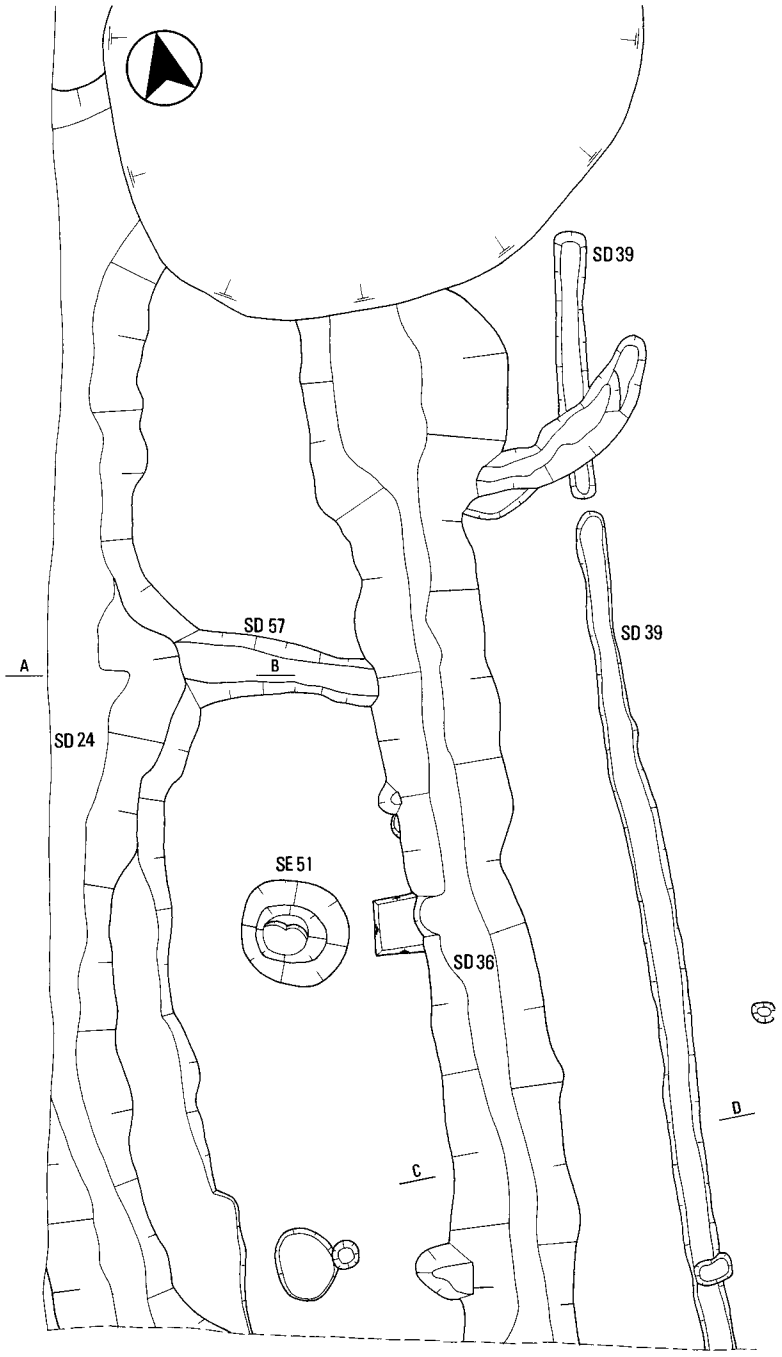


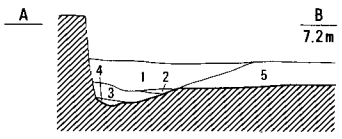
〔東壁〕



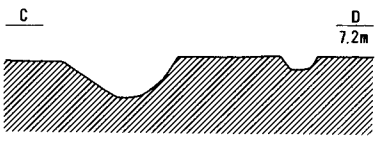
1 灰黄褐色土（10YR4/2・表土）
2 褐灰色粘質土（7.5YR4/1・耕作土）
3 赤褐色土（5YR4/8・床土）
4 黒褐色粘質土（7.5YR3/1・SD62埋土）
5 黄灰色粘質土（2.5Y5/1・SD62埋土）
6 黄橙色土（10YR7/8・遺構面＝地山）
7 灰赤色砂（2.5YR5/2・地山）
8 明褐灰色砂礫（5YR7/1・地山）

0　4m

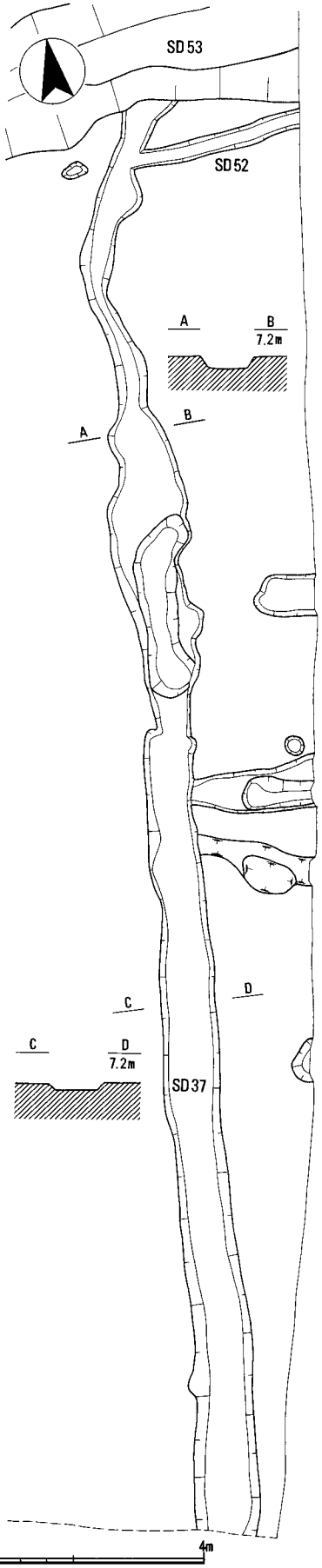




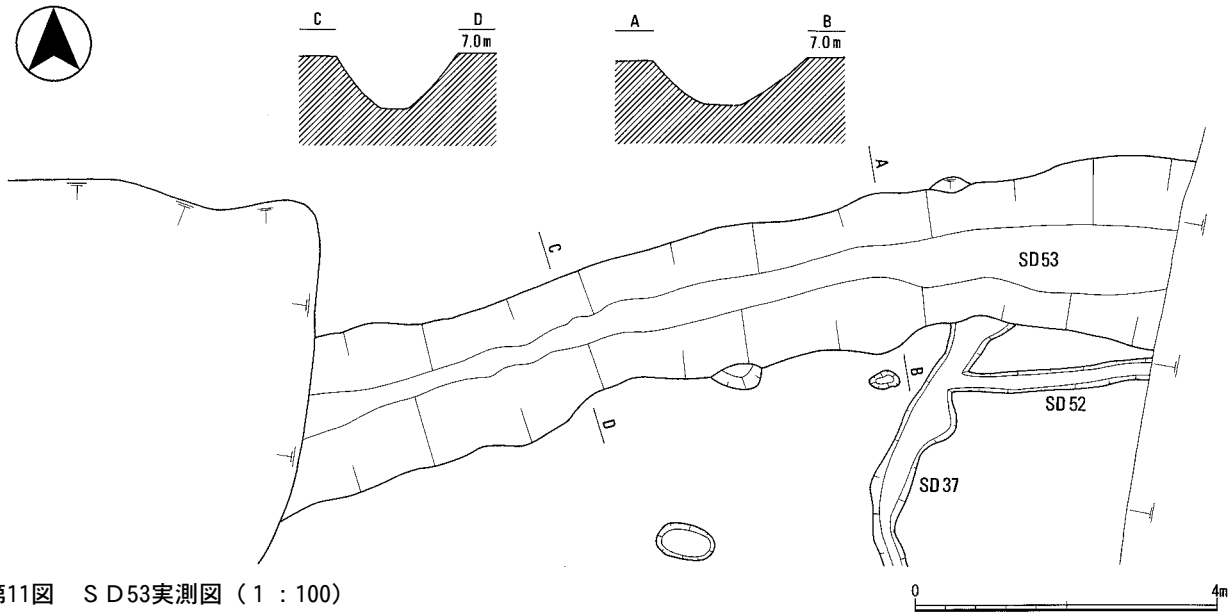
1 黒褐色土（2.5Y3/2・SD24埋土）
2 黒色粘質土（7.5YR2/1・SD24埋土）
3 褐灰色砂質土（10YR4/1・SD24埋土）
4 暗灰黄色砂（2.5Y5/2・SD24埋土）
5 灰褐色粘質土（7.5YR4/2・SD57埋土）



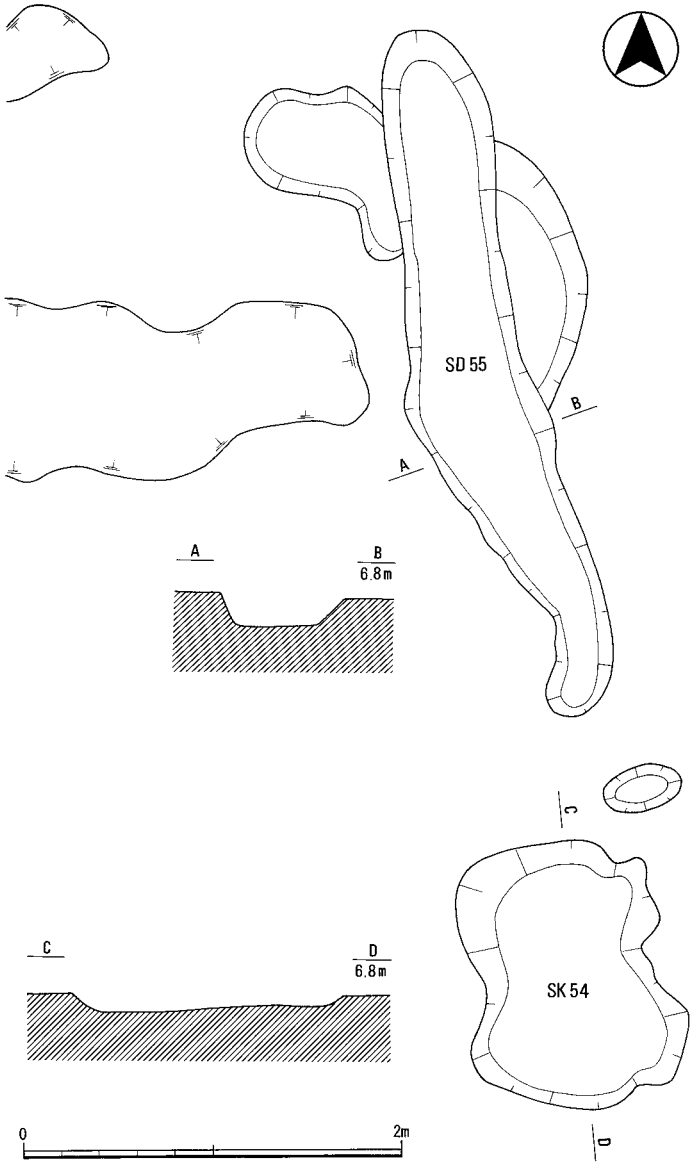
第９図　ＳＤ24・36・39・57実測図（１：100）



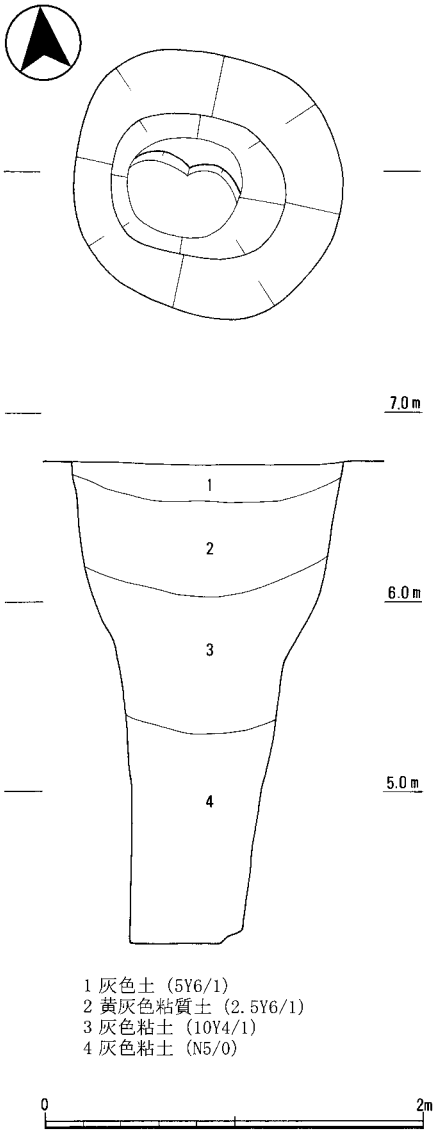
第10図　ＳＤ37・52実測図（１：100）



第11図　ＳＤ53実測図（１：100）



第12図　ＳＤ55・ＳＫ54実測図（１：40）



第13図　ＳＥ51実測図（１：40）

戸時代の所産と考えられる。

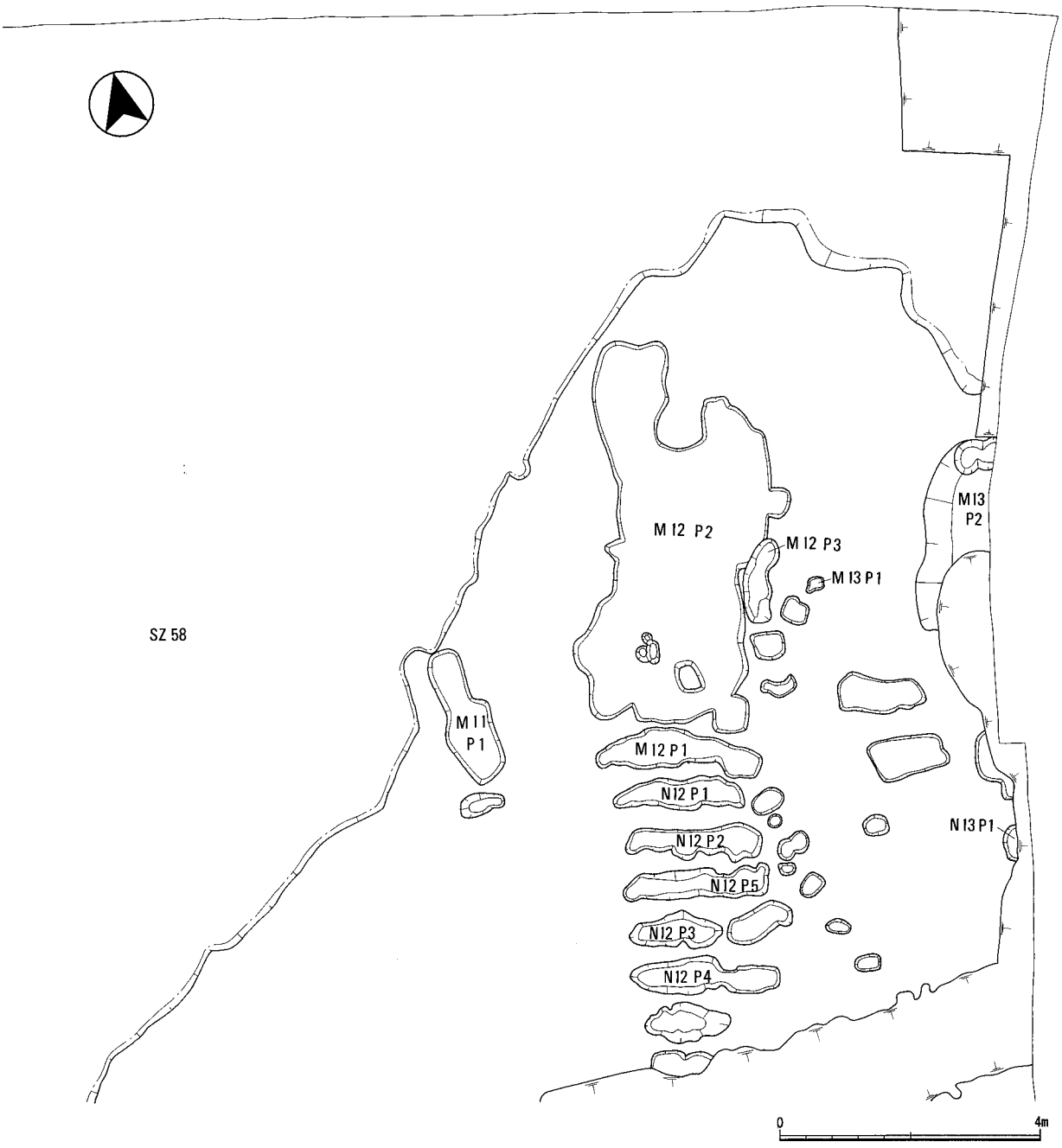
井戸ＳＥ６３　ＳＺ58の南端部で確認した直径1.8mの井戸である。断割を行った結果、深さは2.5mと確認した。平面形は真円であり、陶器が出土していることから、江戸時代以降の遺構であると判断した。

（５）時期不明の遺構

溝ＳＤ３９　調査区中央南部Ｕ９～Ｘ９区で検出した。この溝も第１次調査で検出されているが、幅0.5mと細く、深さは南部で17cmあるものの北側では９cmと浅くなり、Ｖラインで途切れている。方位はおよそＮ１°Ｅであり、ＳＤ24・ＳＤ36とほぼ並行する。出土遺物は非常に少なく、土師器片が数点出土しているが、小片のため詳細不明である。

ピットＭ１２－Ｐ１・Ｎ１２－Ｐ１～Ｐ５他

調査区北東部のM12～N12区付近において、小さな東西に細長いピット群が検出された。埋土は黒色と黄色の土がマーブル状に入りこんでおり、やや砂質である。これらのピット群よりも南側に位置する遺構とは埋土の質が異なる。



第14図　ＳＺ58・ピット群実測図（１：100）

2　Ⅱ区

（1）基本層序

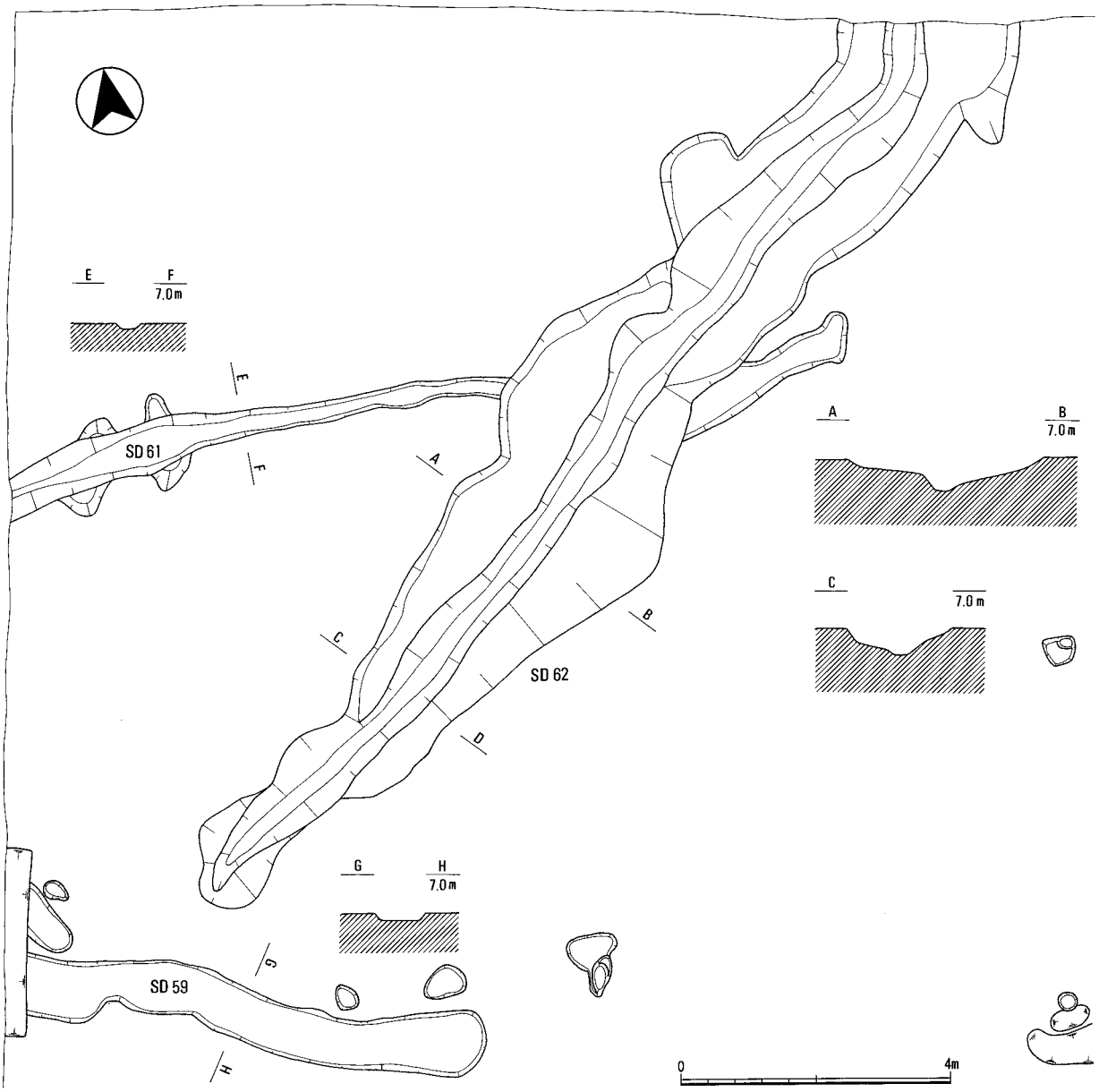
基本的には、上から表土（灰黄褐色土・10YR4/2)、耕作土（褐灰色粘質土・7.5YR4/1)、床土（赤褐色土・5YR4/8)、遺構検出面および地山（黄橙色土・10YR7/8）である。遺構検出面直下は、上から灰赤色砂（2.5YR5/2)、明褐灰色砂礫（5YR7/1）と続く。遺構検出面以下の土層には遺物は含まれておらず、地山と考えられる。

（2）江戸時代の遺構

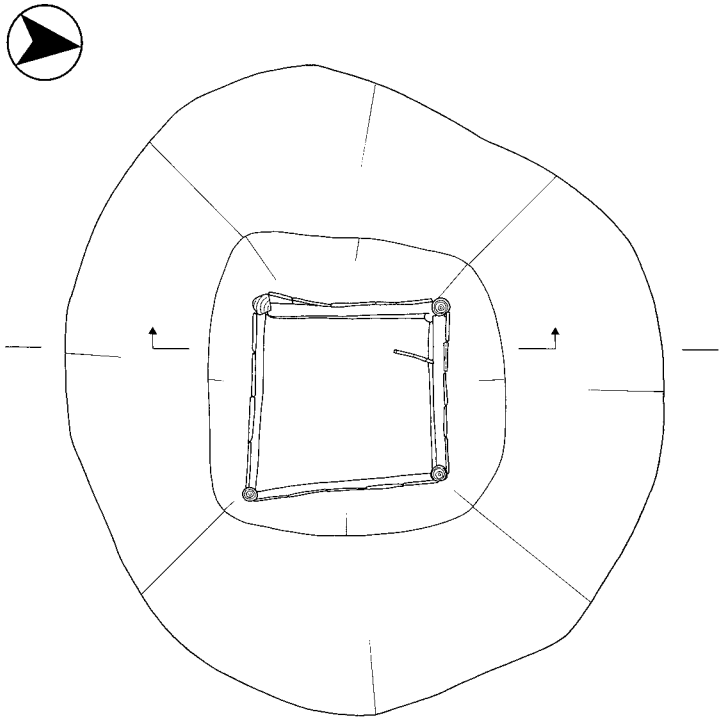
溝ＳＤ６１　調査区北西部Ｓ14～Ｔ14区に位置する東西に延びる溝で、ＳＤ62に先行する。規模は長さ7.5m、幅0.3～0.6m、深さ約0.5mである。出土遺物は非常に少ないが、江戸時代の椀の破片が出土している。

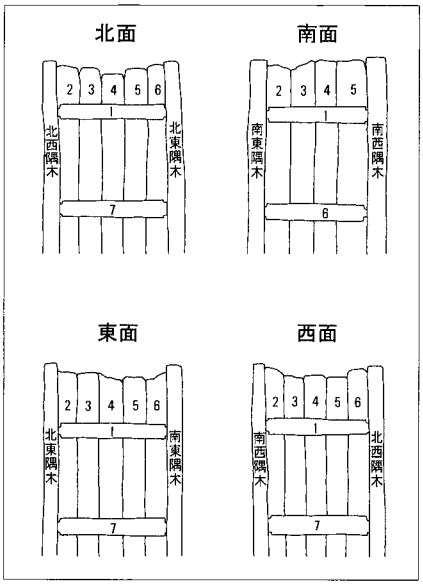
井戸ＳＥ６０　調査区南西部のＶ13～W13区において検出した井戸である。第16図の５層以上の埋土は礫が多く混じる灰色を帯びた土であり、比較的新しい時代の所産であると考えられる。しかし、検出面より深さ約１m付近で掘り形及び井戸側を検出した。掘り形は１辺約1.5mの隅丸方形を呈す。井戸側は一辺約１mである。

井戸側は板材を縦方向に組み、四隅に立てた柱に

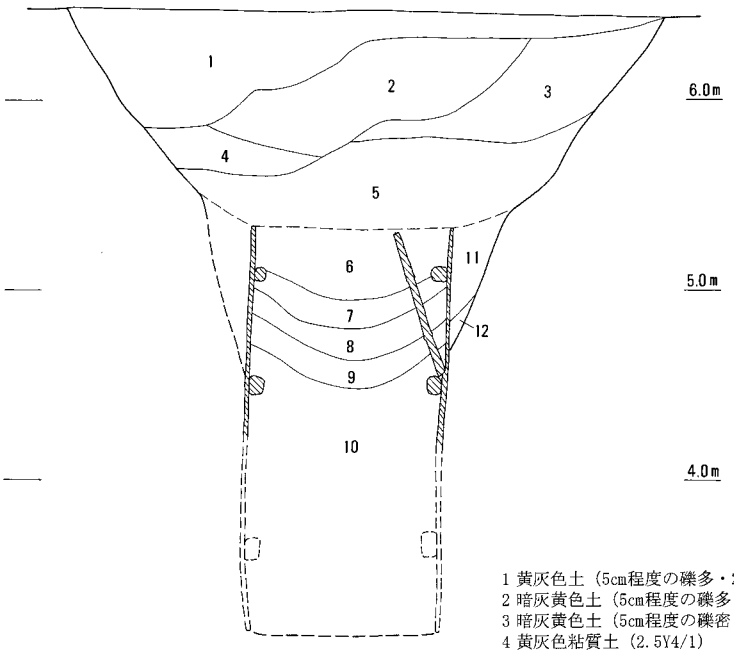


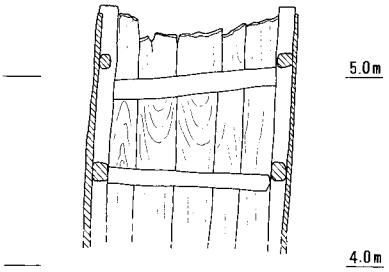
第15図　ＳＤ59・61・62実測図（１：100）



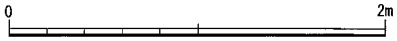


ＳＥ60井戸側材取上げ番号の付与の方法
（模式図）





1 黄灰色土（5cm程度の礫多・2.5Y5/1）
2 暗灰黄色土（5cm程度の礫多・2.5Y5/2）
3 暗灰黄色土（5cm程度の礫密・2.5Y4/2）
4 黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
5 灰色粘質土（5Y4/1）
6 褐灰色土（有機質多・7.5YR4/1）
7 褐灰色粘質土（10YR4/1）
8 黒褐色粘質土（10YR3/2）
9 黄灰色粘質土（有機質多・2.5Y4/1）
10 黒褐色粘質土（砂混じる・2.5Y3/2）



第16図　ＳＥ60実測図（１：40）

取り付けた横桟で保持しており、いわゆる縦板組隅柱横桟どめ井戸に相当する⑤。横桟は隅柱のほぞ穴に差し込んで組まれていたが、３段まであることが確認できた。また、隅柱の上端部は切断された面を残しておりこの上に続くとは考えられない。そのかわりに５層以上には陶器甕の井筒などが据えられていた可能性がある。従って、井戸を放棄した後に上層の井筒を抜き取り、破壊して埋めたと考えられる。

さらに、井戸側の北西隅柱の上で墨書のある木札が出土した。また、井戸側内から節が抜かれた竹筒を斜めに刺さった状態で確認した。竹筒は直径3.8cm、長さ76.6cmで下端部は２段目の横桟に当たっていた。これらの遺物は井戸の廃棄の際の呪儀を示していると考えられる⑥。

井戸の掘削は深さ3.3mまで行ったが、湧水がひどく明確な底部を確認することはできなかった。また、曲物等の確認もできなかった。第６層から連房期の皿が出土している⑦。このため、江戸時代の遺構と考えられる。

溝ＳＤ６２　調査区北部に位置する長さ約17m、最大幅2.2m、深さ約0.5mの溝である。断面形は溝の中央部分のみさらに深くなる形状である。方位はおよそＮ45°Ｅである。遺物は全く出土していないが、ＳＤ61を切っていることから江戸時代以降の遺構と考えられる。また、溝の先端がＳＥ60付近に位置していることから、何らかの関係のもとに掘削された可能性も否定できない。

（３）時期不明の遺構

溝ＳＤ５９　調査区西部にある長さ7.2m、幅0.8m、深さ９cmの非常に浅い溝である。出土遺物は全くなく、時期比定は難しい。

（野嶌　美沙子）

〔註〕

①伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム、1996年）。

②第１次調査担当木野本和之氏、小山憲一氏のご教示による。

③三重県埋蔵文化財センター「土器の変遷～土師器皿について」（『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』、1996年）。

④藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

⑤宇野隆夫「井戸考」（『史林』65－5、1982年）。

⑥水野正好「招福・除災－その考古学－」（『研究報告』第７号、国立歴史民俗博物館、1985年）。

⑦金子健一他「江戸時代美濃窯の変遷」（『江戸時代の美濃窯』瀬戸市埋蔵文化財センター、2003年）。

遺構番号	調査区	大地区	小地区	性格	時期	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）	備　考
ＳＤ24	Ⅰ	Ｅ	Ｔ７～Ｘ７	溝	鎌倉	17	2.9以上	69	第1次調査の延長
ＳＤ36	Ⅰ	Ｅ	Ｕ8～Ｘ8	溝	鎌倉～室町初頭	14	1.7	96	第1次調査の延長
ＳＤ37	Ⅰ	Ｅ	Ｓ12～Ｙ11	溝	平安末期以降	22	1.2	17	第1次調査の延長
ＳＤ39	Ⅰ	Ｅ	Ｕ9～Ｘ9	溝	不明	15	0.5	17	第1次調査の延長
ＳＥ51	Ⅰ	Ｅ	Ｗ8	井戸	鎌倉	1.6	1.4	250	
ＳＤ52	Ⅰ	Ｅ	Ｔ12	溝	江戸	2.6	0.3	4	ＳＤ37を切る
ＳＤ53	Ⅰ	Ｅ	Ｔ9～Ｓ12	溝	鎌倉	12	2	73	
ＳＫ54	Ⅰ	Ｅ	Ｒ12	土坑	平安～鎌倉	1.4	1.1	11	不明瞭な遺構
ＳＤ55	Ⅰ	Ｅ	Ｑ12	溝	平安～鎌倉	3.7	0.6	14	
欠番									
ＳＤ57	Ⅰ	Ｅ	Ｖ8	溝	鎌倉	2.6	0.9	36	ＳＤ24、ＳＤ36に切られている
ＳＺ58	Ⅰ	Ｅ	Ｎ9～Ｋ14等	不明	鎌倉	－	－	92	川もしくは沼の痕跡か？
ＳＤ59	Ⅱ	Ｆ	Ｖ13～Ｖ14	溝	不明	7.2	0.8	9	出土遺物なし
ＳＥ60	Ⅱ	Ｆ	Ｖ13～Ｗ13	井戸	江戸	検出3.2 掘形1.5	検出3.2 掘形1.5	330 以上	木札出土
ＳＤ61	Ⅱ	Ｆ	Ｓ14～Ｔ14	溝	江戸	7.5	0.6	17	ＳＤ62に切られている
ＳＤ62	Ⅱ	Ｆ	Ｕ14～Ｓ16	溝	江戸以降	17	2.2	50	出土遺物なし
ＳＥ63	Ⅰ	Ｅ	Ｎ9	井戸	江戸以降	1.8	1.8	250	ＳＺ58を切る

第１表　遺構一覧表

Ⅳ　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱（コンテナバット）にして16箱である。中世の遺物が最も多い。以下、土器等の遺物からⅢ章の遺構の記述順に触れ、次にＳＥ60出土の木製品について触れていきたい。

（１）平安時代

ＳＤ３７(１・２)　１・２は土師器甕の口縁部である。１は口縁端部が内側に肥厚している。色調はにぶい黄橙色を呈する。２の口縁部はやや外反しながら直線的に延びている。口径は16.7cmで、色調は橙色である。いずれも11世紀前半のものであろう[1]。

（２）鎌倉時代～室町時代初頭

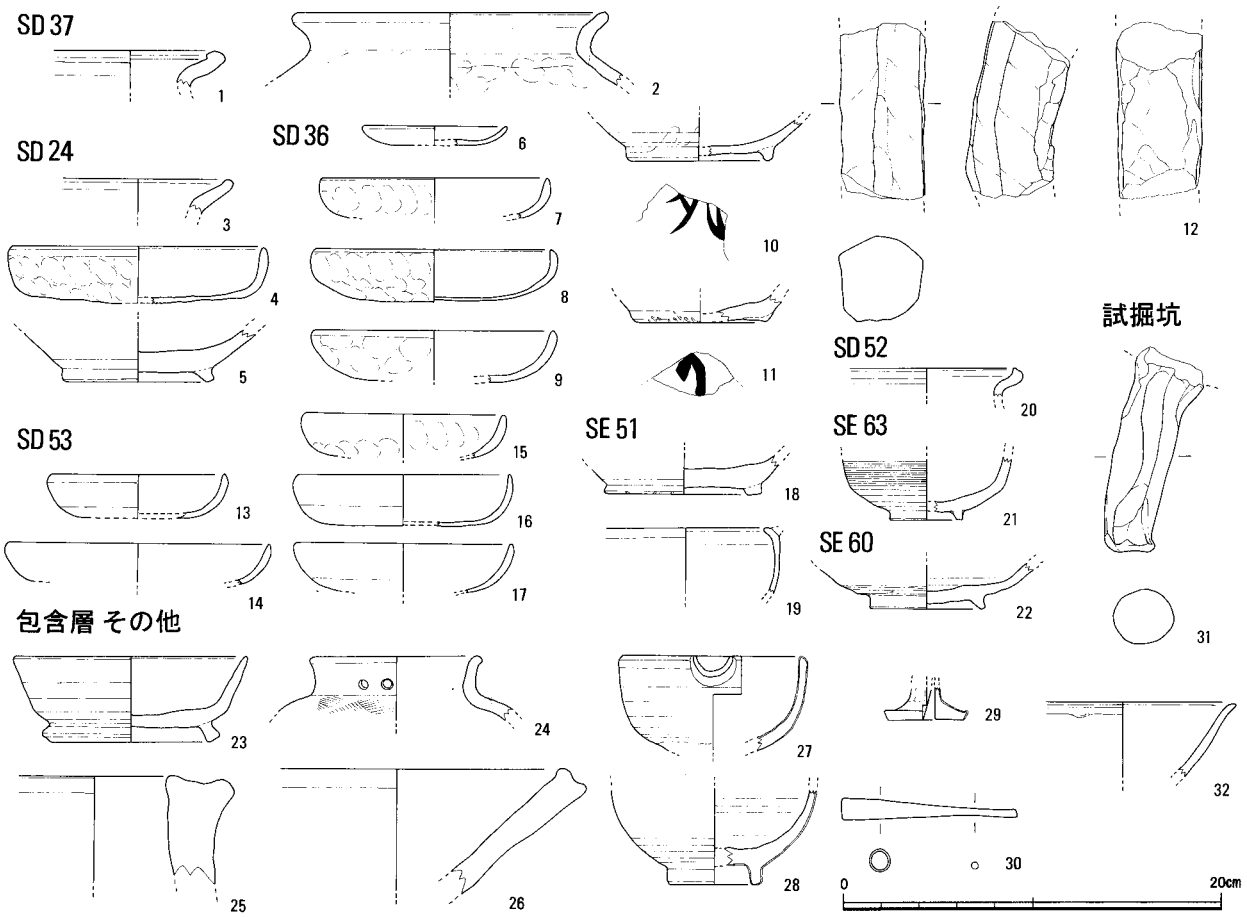
ＳＤ２４(３～５)　３は土師器甕である。小片であるため、口径は不明である。口縁端部はわずかに肥厚しているものの、折り返しは認められず、古代のものと思われ、混入と考えられる。

４は土師器皿である。口径は13.5cmとやや大形のものである。胎土は浅黄橙色を呈する。伊藤裕偉氏による南伊勢Ⅱa期（13世紀前半頃）に位置付けられよう[2]。

５は山茶椀である。高台はしっかりとしたものである。藤澤良祐氏による編年の尾張型第４型式（12世紀前半～中頃）に相当する[3]。

ＳＤ３６（６～12）　６は土師器小皿である。口径は7.6cmである。色調は灰白色である。７～９は土師器皿である。口径は12.2～13.0cmであり、近似値である。いずれも南伊勢系のものであり、Ⅱb期（13世紀末～14世紀中頃）に位置づけられよう。

10は灰釉陶器椀である。底部外面、体部下半はロクロナデであり、削り調整は省略されている。高台は低く、少し幅広である。底部外面に墨書が書かれており、「宛」もしくは「宛」の可能性がある。これらの特徴から、折戸53型式（10世紀前半）に相当しよう[4]。



第17図　出土遺物実測図（１：４）

11は山茶椀である。高台は非常に低く、端部には籾殻痕が残存している。尾張型第６型式（13世紀前半）に位置づけられる。また、底部外面に墨書が書かれているが、小片のため判読は難しい。

12は支脚状石製品である。上部も下部も欠損しており、全体の形は復元できない。外面には面があり磨かれているような印象を受ける。被熱の痕跡はなく、用途は不明である。

ＳＤ５３（13～17）　13～17は土師器皿である。口径は13が9.6cmとやや小型であるが、15～17は10.8～11.6cmと近似値である。14は口径が14.0cmであり、大型の部類に入る。色調は13・15・16が浅黄橙色を呈し、14・17は灰白色を呈する。いずれも口縁部はやや厚みをもつが底部は非常に薄く、南伊勢Ⅱb期に位置づけられよう。

ＳＥ５１（18・19）　18は山茶椀である。高台の断面は扁平な台形を呈しており、渥美型第６型式（13世紀前半）と思われる。高台端部には籾殻痕が残存している。

19は十能と思われる土師器であるが、羽釜の口縁部である可能性も否定できない。口縁端部は厚みをもって内弯しており、その外面には剥離面がある。色調は浅黄橙色を呈する。

（３）江戸時代以降

ＳＤ５２（20）　20は土師器鍋である。小片のため口径は不明である。色調はにぶい褐色を呈する。口縁端部の内側への折り返しがなくなり、つまみ上げるだけになっている。南伊勢系の鍋でも江戸時代のものであろう。

ＳＥ６３（21）　21は糸目湯呑椀である。体部外面にはカキメが施されている。瀬戸美濃産第９小期[5]と思われ、19世紀前半に相当する[6]。

ＳＥ６０（22）　22は輪禿皿である。底部内面に輪状に施釉がされていない箇所がある。瀬戸産で、連房第５小期と考えられ、17世紀末にあたる[6]。

（４）包含層出土遺物（23～30）

23は須恵器杯である。口径は12.4cm、高台径は9.4cmである。体部は底部から弯曲して直線的にのびる。高台はあまり高くなく、端面は外方に向いている。田辺昭三氏の編年のＴＫ48～ＭＴ21型式（７世紀末～８世紀初頭）に相当しよう[7]。

24は土師器の茶釜である。口縁部に２個１対の孔が残っている。体部外面はハケが施されている。色調は淡橙色を呈する。

25は常滑産の甕である。破片であるため口径は不明であるが、大型の甕であると思われる。色調は褐灰色を呈する。26は常滑産の鉢である。色調は橙色である。

27は片口椀である。内外面に浅黄色の釉が施されているが、外面下部に施釉のない部分がある。美濃産で19世紀頃のものと思われる[6]。

28は陶器椀である。外面には灰白色の釉が施されているが、内面は施釉されていない。肥前産のものと思われ、江戸時代の所産である[6]。

29は美濃産の秉燭である。底部外面には糸切り痕が明瞭に残存している。時期は連房第８～９小期と思われ、18世紀末～19世紀前半に相当する[6]。

30は銅製のキセルである。太い部分で直径1.05cm、細い部分で直径0.4cmである。

（５）範囲確認調査出土遺物（31・32）

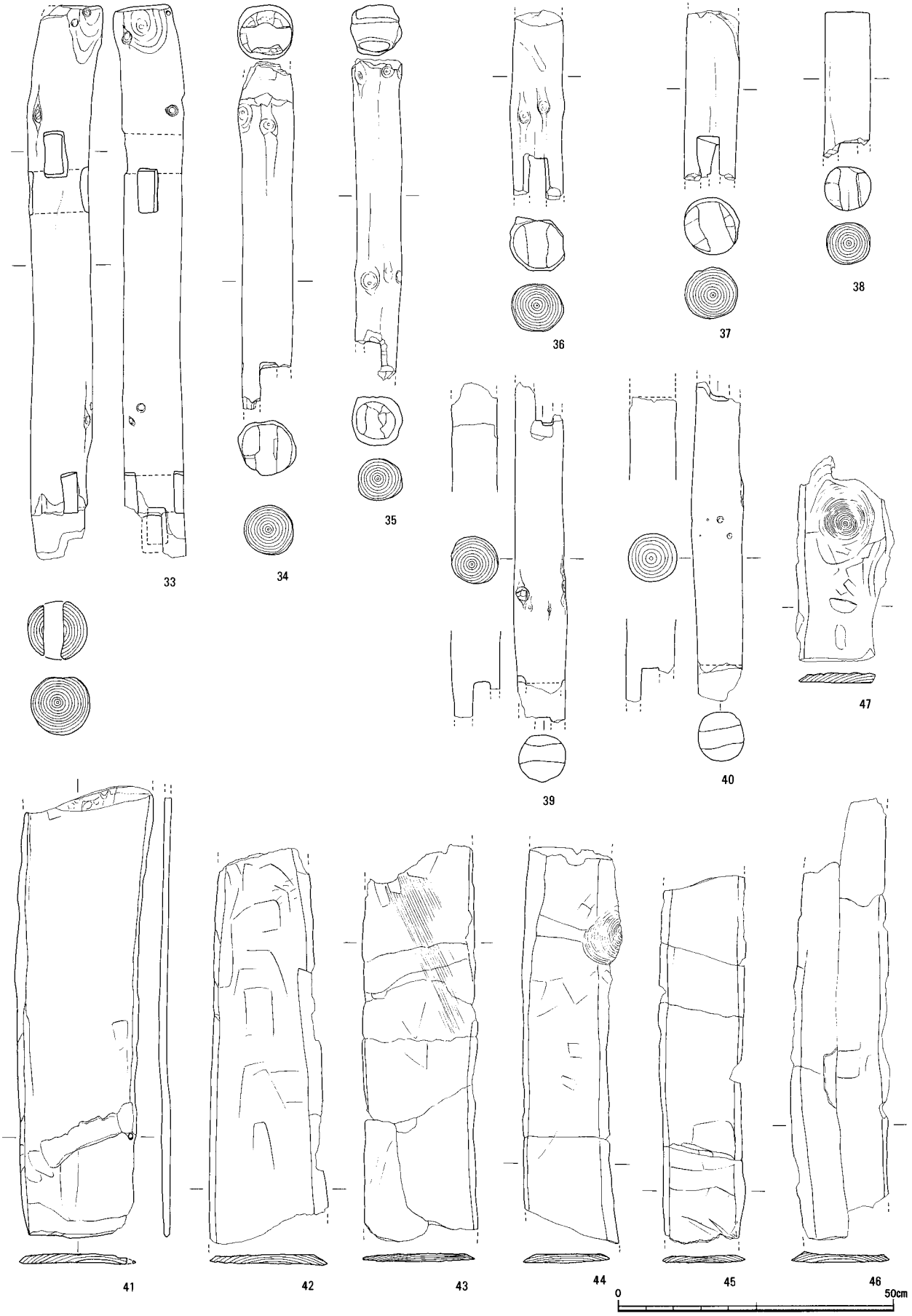
31は鍋もしくは土馬の脚部と思われる。外面にはほとんど面をもたず、断面は直径約3.2cmで円形に近い。色調はにぶい橙色を呈する。伊勢では脚をもつ鍋は類例が少なく、この遺物が鍋であるとすれば珍しい出土例であろう。

32は白磁椀の口縁部である。小片のため口径は不明である。口縁端部はわずかに外反し、体部は直線的である。

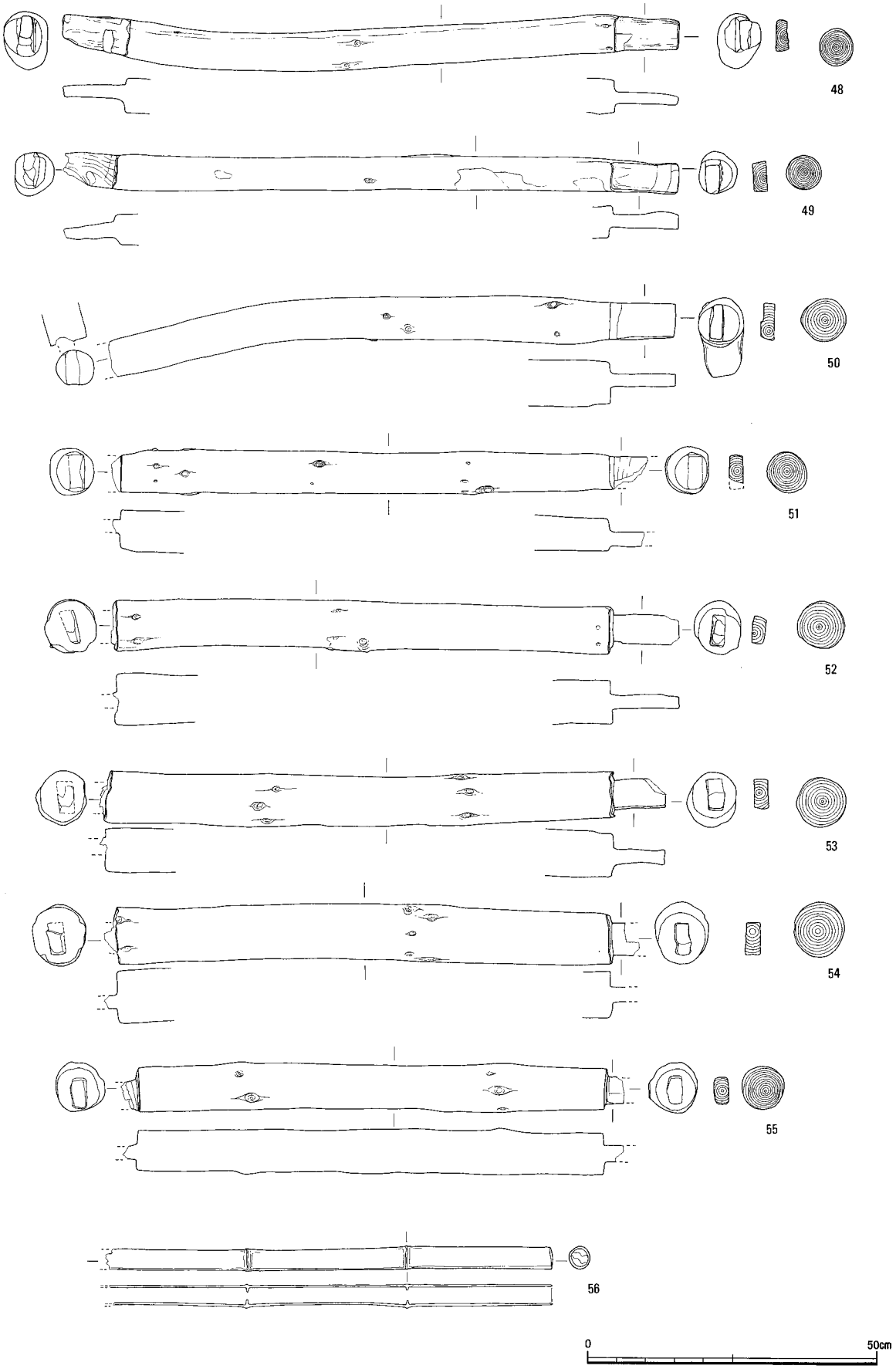
（６）ＳＥ６０出土木製品（33～57）

33～55はＳＥ60出土の井戸側材である。このうち、33～40は四隅に立てられていた隅柱である。直径10cm前後の木材を使用している。最上部にあった33・38は上端部に切断された面を残している。また、隅柱には横桟の枘を差し込む長方形の枘穴がほぼ直角に二方向あいている。残存状態のよい33では約60cmの間隔をあけて二段の枘穴が残存している。枘穴は縦約８cm、幅約４cmである。

41～47は縦板である。44～47は１面につき５枚の縦板が設置されていた北・東・西面（第16図参照）の縦板である。これらの幅は16.0～18.0cmである。一方、４枚の縦板が使用されていた南面の縦板（41～43）は21.0～23.4cmと幅が広い。



第18図　ＳＥ60出土井戸側材実測図（１：10）



第19図　ＳＥ60出土井戸側材・息抜筒実測図（１：10）

48～55は隅柱にとりつけられた横桟である。直径７～８㎝前後の木材を使用している。長さは90～100cm前後である。両端に隅柱に差し込む枘をもつ。

56は息抜筒として使用されたと思われる節が抜かれた竹筒である。直径3.8cmほどの細い竹を使用しており、残存長は76.6cmである。

57は北西の隅柱の上で出土した木札である。下側の一部は欠損しており、長さ41.1cm、幅9.3cm、厚さ0.5cmである。表面には墨書が残っているが、その文面については次節を参照されたい。

（野嶌　美沙子）

（７）ＳＥ６０出土木札（57）

奈良県南部吉野郡から、和歌山県南部熊野にまたがる大峯山系は、古来より修験道の中心地として知られている。近年、熊野古道の一ルート、大峯奥駈道として世界遺産に登録されている。修験道は様々な苦行や捨身により霊験を体得しようとする行者達により現在まで延々と受け継がれている山岳信仰である。近世以降、修験道の行者は山伏ともいわれ、本来の入峰修行以外に、自分たちの会得した修行成果を一般の人々に“祈祷”という姿で表現し、各地に男性のみの「大峯講」や「山上講」を構成している。そのような講の中心である「先達」や「大先達」として修行を含めた物見遊山的な登拝をおこなっている。その際、供養や顕彰目的で紙・木・金属製の祈祷札を作成している。今回出土の木札もその一枚とみられる。

文字内容は下記であるが、墨跡の欠落が激しく、判読は墨に含まれていた膠痕を斜光にておこなった。

翻刻

「　　宝暦二年　吉　野　山

（カンマン）奉修大峯山上護摩供如意祈攸

九月吉日　□　□　□　」

（櫻　本　坊）？

・（カンマン）は不動明王主尊寺院の護摩札に書かれている梵字である⑧。（カンマーン）の可能性もある。

・□□□は塔頭名が記されていると考えられる。

（財団法人元興寺文化財研究所　岡本　広義）

〔註〕

①土師器鍋については下記の文献に拠った。

新田洋「平安時代～中世における煮沸用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」（『三重考古学研究』１、三重考古学談話会、1985年）

伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）。

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム、1996年）。

②土師器皿については下記の文献に拠った。

三重県埋蔵文化財センター「土器の変遷～土師器皿について～」（『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』、1996年）。

伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』、第１回土器・陶磁器編年研究会、2004年）。

③陶器山茶椀・山皿については下記の文献に拠った。

藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

④山下峰司「４．灰釉陶器・山茶椀」（『概説　中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会、1995年）。

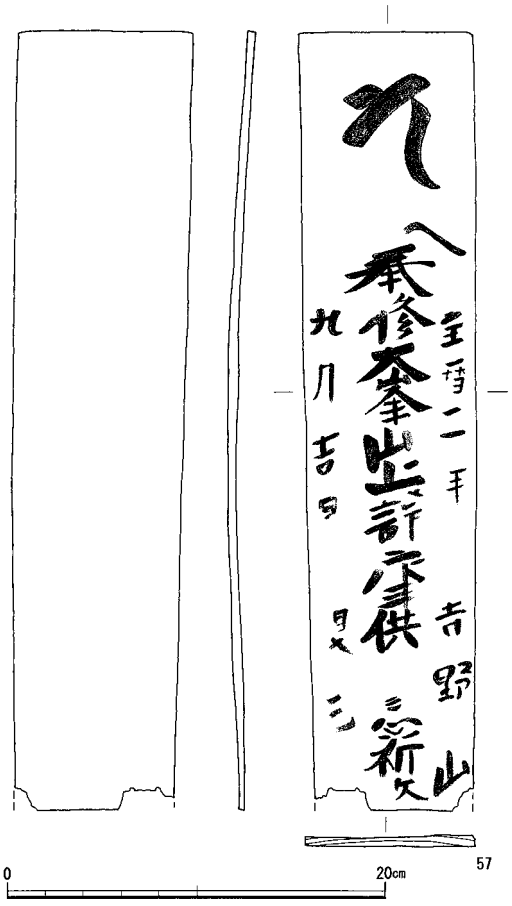
⑤藤澤良祐・岡本直久「江戸時代の瀬戸窯業」（『江戸時代の瀬戸窯』、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、2002年）。

⑥近世以降の陶器については藤澤良祐氏のご教示による。

⑦田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園、1966年）。

田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1985年）。

⑧徳山暉純『梵字手帖』（木耳社、1976年）。



第20図　ＳＥ60出土木札実測図（１：４）

報告番号	実測番号	種　類	器種等	出土位置	法量（cm）			調整技法	胎土	焼成	色　調	残　存	備　考
					口径	底径	器高						
1	003 -05	土師器	甕	E-U11 SD37			残 1.9	ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	外面スス付着
2	003 -04	土師器	甕	E-U11 SD37	16.7		残 4.0	外面:ナデ、内面:オサエ・ナデ 口縁部:ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁部 2/12	
3	002 -06	土師器	甕	E-V7 SD24			残 1.8	ヨコナデ	密	良	灰白 10YR8/2	口縁部 1/12	
4	002 -01	土師器	皿	E-V7 SD24下層	13.5		3	外面:オサエ・ナデ 内面:ナデ、口縁部:ヨコナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 3/12	
5	002 -08	陶器	山茶椀	E-V7 SD24上層		8	残 2.8	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部 11/12	尾張型第4型式
6	002 -05	土師器	小皿	E-V8 SD36下層	7.6		1	外面:オサエ・ナデ 内面:ナデ	密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部 4/12	
7	002 -04	土師器	皿	E-V8 SD36下層	12.2		2.1	外面:オサエ・ナデ内面:ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 3/12	
8	002 -02	土師器	皿	E-U8 SD36下層	12.8		2.8	外面:オサエ・ナデ内面:ナデ	密	良	灰白 10YR8/2	口縁部 4/12	
9	002 -03	土師器	皿	E-V8 SD36下層	13		2.6	外面:オサエ・ナデ 内面:ナデ、口縁端部:ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 9/12	
10	003 -01	陶器	灰釉陶器椀	E-V8 SD36下層		7.8	残 2.1	外面:ロクロナデ・貼付ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部 3/12	墨書あり 折戸53型式
11	003 -02	陶器	山茶椀	E-V8 SD36下層		7.4	残 1.4	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部 2/12	墨書あり 尾張型第6型式
12	003 -03	石製品	支脚状	E-X8 SD36		幅 4.5	残長 9.2						
13	006 -5	土師器	皿	E-S11 SD53下層	9.6		残 2.3	ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 2 /12	
14	006 -4	土師器	皿	E-S11 SD53下層	14		残 2.1	ナデ	密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部 2 /12	
15	006 -3	土師器	皿	E-S12 SD53上層	10.8		残 2.2	オサエ・ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 4/12	
16	006 -1	土師器	皿	E-S11 SD53下層	11.6		2.7	ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 6/12	
17	006 -2	土師器	皿	E-S11 SD53下層	11.6		残 2.6	ナデ	密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部 4/12	
18	004 -01	陶器	山茶椀	E-W8 SE51下層			残 2.1	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白N7/0	底部 11/12	渥美型5型式
19	004 -02	土師器	十能？	E-W8 SE51上層			残 3.6	内外面:ナデ 口縁部:ヨコナデ・剥離	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 1/12	
20	003 -06	土師器	鍋	E-T12 SD52			残 1.5	ヨコナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR6/3	口縁部 1/12	外面スス付着
21	004 -04	陶器	糸目湯呑椀	E-N9 SE63		3.9	残 3.4	外面:カキメ 内外面:施釉	密	良	施釉:灰白7.5Y7/2 素地:灰白10YR8/2	口縁部 4/12	瀬戸美濃産 第9小期
22	004 -03	陶器	輪禿皿	F-V13 SE60			残 2.4	施釉	密	良	灰白 2.5Y8/2	底部 3/12	瀬戸産 連房第5小期
23	002 -07	須恵器	杯	E-V7 SD24	12.4	9.4	4.5	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ 内面:ロクロナデ・ナデ	密	良	灰 N5/0	口縁部 3/12	混入と思われ 包含層扱い
24	005 -04	土師器	茶釜	E 表土	9		残 3.4	外面:ハケ 内面:ナデ 口縁部:ヨコナデ	密	良	淡橙5YR8/4 断面:ｵﾘｰﾌﾞ黒 7.5Y3/1	口縁部 1/12	2個1対の孔
25	005 -02	陶器	甕	E 表土			残 5.7	回転ナデ	やや粗	良	褐灰 7.5YR4/1	口縁部 1/12	常滑産
26	005 -01	陶器	鉢	E-O11 撹乱			残 6.7	回転ナデ	やや粗	良	橙 2.5YR6/6	口縁部 1/12	常滑産
27	005 -05	陶器	片口椀	E 表土	10		残 5.0	施釉	やや密	良	施釉:浅黄2.5Y7/4 素地:灰白2.5Y8/2	底部3/12	美濃産
28	005 -06	陶器	椀	F 表土		5	残 5.1	外面:施釉 内面:ロクロナデ	密	良	施釉:灰白2.5Y7/1 素地:灰白5Y7/1	底部5/12	肥前産
29	005 -03	陶器	秉燭	E-O12 撹乱		4.4	残 1.8	底部:糸切痕	密	良	施釉:黒5YR1.7/0 素地:灰白5Y8/1	底部完存	美濃産 第8or9小期
30	006 -7	銅製品	キセル	E-T8 撹乱		径 1.05	長 9.25						
31	015 -02	土師器	脚部	試掘坑		径 3.2	残 10.8		密	良	にぶい橙5YR7/4 7.5YR7/4		鍋か土馬の 脚部
32	015 -01	磁器	白磁椀	試掘坑			残 4.0	施釉	密	良	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	

第２表　出土遺物観察表

報告番号	実測番号	種類	取上げ番号	法量（cm）			備考
				残長	幅or径	厚さ	
33	011-1	隅柱	北西隅木	100.2	11.7		端部残存良好
34	009-01	隅柱	南西隅木	62.9	10.3		
35	009-05	隅柱		58.1	9.2		
36	009-02	隅柱	北東隅木	34.3	9.9		
37	009-03	隅柱	南東隅木	30.9	9.8		
38	009-04	隅柱		26.4	8.4		端部完存
39	011-2	隅柱	北東隅木	61.6	9.8		
40	011-3	隅柱	北東隅木	58.8	9.5		
41	012-01	縦板	南木4	81.8	23.4	1.6	
42	012-02	縦板	南木5	71.8	21.5	1.7	
43	007-01	縦板	南木3	72.0	21.0	1.5	製材時のノコギリ痕？
44	007-02	縦板	北木3	71.9	17.9	1.6	
45	008-01	縦板	北木5	66.7	16.0	1.4	
46	008-02	縦板	東木6	79.9	18.0	1.8	
47	007-03	縦板	西木6	37.2	17.5	1.9	
48	013-01	横桟	南木1	106.1	6.9		
49	013-02	横桟	北木1	105.9	6.5		
50	014-01	横桟	東木1	97.4	7.9		
51	014-02	横桟	西木1	92.0	7.5		
52	010-1	横桟	南木7	97.6	8.0		
53	010-2	横桟	北木7	97.4	8.5		
54	010-3	横桟	東木7	91.6	9.8		
55	011-4	横桟	西木7	86.3	8.3		
56	010-4	息抜筒		76.6	3.8		節は貫通
57	001-01	木札		41.1	9.3	0.5	

第３表　ＳＥ60出土木製品観察表

＜遺物観察表凡例＞

報告番号：文章と図版内の番号に対応する。

実測番号：遺物実測図の番号に対応する。

種　　類：土師器、須恵器などを記入している。山茶椀・灰釉陶器椀については「陶器」とし、「器種等」欄に「山茶椀」「灰釉陶器椀」と記入した。

器 種 等：甕・皿・鍋などといった器種を記入している。

出土位置：出土したグリッド、遺構、層位等を記入している。

法　　量：基本的には、口径、底径、器高の数値をcmで記入している。それ以外のものについてはそれぞれの欄にどこの部位の数値かを明記している。

調整技法：おおよそを表記した。

胎　　土：密・やや密・やや粗・粗の４段階で表記した。

焼　　成：良・並・不良の３段階で表記した。

色　　調：『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編　1994）を基準にしている。

残　　存：口縁部もしくは底部に対して12分の○という表記で記入している。

Ⅴ　自然科学分析

丁長遺跡では、ＳＥ60出土の木札１点、および井戸側材６点について樹種同定を行った。

１　ＳＥ６０出土木札

（１）同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の３断面の切片を剃刀を用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。光学顕微鏡写真については写真図版９に掲載した。

（２）同定結果

結果は第４表に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。

スギ　Cryptomeria JaponicaD.Don ひのき科スギ属

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に点在する。分野壁孔はスギ型で１分野に２個見られる。放射組織は単列で１～８細胞高である。

分布：暖帯、温帯下部：本州、四国、九州、主として太平洋側

樹形：常緑高木で、直幹性。樹高30～40m、胸高直径２mに達する。

用途：建築、家具、桶、樽、船、土木、下駄、彫刻、楽器　等

出土事例：建築材、桶、底板、舟・船、下駄、箸　等

〔参考文献〕

北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ、保育社、1979年。

島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』、地球社、1982年。

島地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』、雄山閣、1988年。

（財団法人元興寺文化財研究所　木沢　直子）

２　ＳＥ６０出土井戸側材

（１）同定方法

木材の横断面（小口面）・接線断面（板目面）・放射断面（柾目面）について、剃刀を用い切片を採取し、ガムクロラールで封入し、永久プレパラートを作成した。この木材プレパラートは、光学顕微鏡で40～400倍で観察して樹種を同定した。光学顕微鏡写真については写真図版10に掲載した。

（２）同定結果

観察した結果、いずれの木材も、以下の特徴によりマツ属複維管束亜属と同定された。

マツ科　Pinus　マツ属複維管束亜属

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管および水平・垂直樹脂道をとりまくエピセリウム細胞からなる針葉樹材。放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状の肥厚が見られる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツ（P.densiflora）とクロマツ（P.thunbergii）がある。材はいずれも建築材や土木材などに利用される。

アカマツ：暖帯から温帯下部の乾燥した陽光地に生育し、人間の活動地域に多く見られ、二次林を形成している。

クロマツ：本州（青森県以南）・四国・九州・琉球・朝鮮南部に分布する。海岸沿いに多く、所により標高800-900mまで生育する常葉針葉樹である。

（株式会社パレオ・ラボ　藤根　久）

番号	取上げ番号	用途	樹種
1		木札	スギ
2	南木２	縦板	マツ属複維管束亜属
3	西木２	縦板	マツ属複維管束亜属
4	西木５	縦板	マツ属複維管束亜属
5		横桟	マツ属複維管束亜属
6	北木６	縦板	マツ属複維管束亜属
7		隅柱	マツ属複維管束亜属

第４表　樹種同定結果

Ⅵ　結　語

1　丁長遺跡の変遷

丁長遺跡は、古代官道の延長部が第１次調査で発見されたために新規登録された遺跡である。しかし、古代の所産と確実にいえる遺構は第１次調査、第２次調査ともにこの古代官道のみであった[1]。

続く中世には、第２次調査Ⅰ区（以下Ⅰ区）の南部にある溝群を中心とする遺構が認められるようになる。特にＳＤ24とＳＤ36は第１次調査でも検出されている。第１次調査でのＳＤ24からは渥美型第４・５型式（12世紀～13世紀前半）[2]に属する山茶椀が出土しており[3]、やはり13世紀前半の遺構と考えられる。一方、第１次調査のＳＤ36から出土した土師器皿は、伊藤編年Ⅲa期（14世紀末～15世紀初頭）[4]に近いものもあるが、中心はⅡｂ期（13世紀末～14世紀中頃）であり、下っても14世紀後半と考えるべきであろう。また、このＳＤ36以外に室町時代まで下る遺構はない。一方、第２次調査Ⅱ区（以下Ⅱ区）では中世に属する遺構は皆無である。従って、中世の遺構の中心は鎌倉時代前期後半と考えられる。

さらに、江戸時代以降になるとⅠ区での遺構は井戸１基のみとなり、逆にそれまで皆無であったⅡ区では溝数条、井戸１基が確認されるようになる。

このように、丁長遺跡の遺構は時代が下るにつれて北へその中心が移っていくことが指摘できる。

ただし、丁長遺跡は史跡斎宮跡のすぐ近くに立地するにもかかわらず、いずれの時期も全体的に遺構は希薄であり、出土遺物も少ない。第２次調査後に行われた工事立会調査にいたっては、遺構・遺物ともに確認されておらず、遺跡範囲もそれほど広がらない可能性が高いだろう。

2　溝と条里型地割

今回の調査で検出された遺構として、Ⅰ区の溝群が注目できる。ＳＤ24は総延長87m以上、ＳＤ36は同47m以上であり、いずれも南北方向に延びる（ＳＤ24はＮ２°Ｗ、ＳＤ36はＮ２°Ｅ）。この２条の溝は第１次調査で道路の側溝である可能性も指摘されている[5]。しかし、前述したように時期差が見受けられ、Ⅰ区中央部以北には続かず、また２条の溝をつなぐような溝（ＳＤ57等）も存在することから、道路の側溝である可能性は低いであろう。

一方、ＳＤ53は東西方向に延びる（Ｅ10°Ｎ）幅２ｍの比較的大きな溝である。伊藤編年Ⅱｂ期に相当する土師器皿が出土しており、埋没時期は13世紀末～14世紀中葉と考えられる。この溝はＳＤ24・ＳＤ36と約80度の角度で斜交している。また、埋土はＳＤ24と酷似しており、Ⅰ区西壁土層断面ではその関係を明確にできなかった。

これら３条の溝はそれぞれ時期差が認められる。しかし、検出状況や埋土の状況から何らかの関係性がある可能性が高いのではないだろうか。

ここで丁長遺跡の立地する多気郡の条里型地割を見てみよう。多気郡では史跡斎宮跡の南部に斜交条里を最大の特長とする条里型地割が展開していることが知られている[6]。この条里型地割の振幅は、南北軸は真北に対してＮ７°Ｗ～Ｎ５°Ｅ、東西軸はＥ４°Ｎ～Ｅ６°Ｎである。このうち一部参宮街道と重なって東西に延びる軸線が、斎宮寮方格地割の東西軸と同一方位（Ｅ４°Ｎ）を示す軸として「多気郡東西基軸線」（以下東西基軸線）とされている。また、東西基軸線と直交関係にある字「上六ノ坪」に西接する軸線を「多気郡南北基軸線」（以下南北基軸線）とされている。これらの基軸線と丁長遺跡で検出した溝群の関係を表したものが第22図である[7]。この図を見ると、東西基軸線が丁長遺跡第２次調査区のⅠ区内を通っているが、東西基軸線上には遺構がないことが分かる。しかし、東西基軸線よりも約10ｍ南にＳＤ53が延びている。ＳＤ53の方位はＥ10°Ｎであり、東西基軸線のＥ４°Ｎとは６°の差があるが、溝の長さがわずか12mであり、南よりに弯曲しながらさらに東側へ延びることを考慮すれば、東西基軸線とほぼ並行するとしてもよいであろう。従って、ＳＤ53は東西基軸線と関わりのある遺構と位置付けられ、第Ⅲ章では不明としていた西側への延長については、その可能性が強まるといえる

のではないだろうか。

一方、南北に延びるＳＤ24・ＳＤ36はやや弯曲しているものの、南北基軸線とほぼ並行している。しかし、この溝群の位置的なことを考慮すると、単なる水路として機能していたのではなく、条里型地割に則って設けられた溝といえるだろう。

ここで今後の課題について述べておく。伊藤氏によれば条里型地割の施行は８世紀後葉まで遡る⑧とされているが、丁長遺跡では条里型地割に関係のある遺構は古代まで遡るものはない。従って、古代における史跡斎宮跡の周辺遺跡の展開について今後さらに追及していく必要があるだろう。

３　ＳＥ６０出土木札

Ⅱ区の近世と思われる井戸ＳＥ60から木札が出土した。墨跡から大峯信仰に関係する護摩木であることが分かった。『明和町史』によれば、かつて大峯講は町内どの地区でも行われていたが、多くの地区は太平洋戦争の頃に中断したようである。一方で、上村や有爾中では世義寺（伊勢市岡本町）へ柴灯大護摩の大法要に出かけて境内で護摩木の先を柴灯護摩の火で少し焦がしてもって帰るという風習が残っており、この風習も昔は明和町内どこでもあったようである⑨。

ＳＥ60出土木札には明瞭に焦がされた痕跡はないものの、下端部が欠損しているため、参拝の際に護摩の火で焦がして持ち帰り、井戸の廃棄の際に埋められた可能性もあるだろう。（野嶌　美沙子）

〔註〕

①第１次調査担当木野本和之氏、小山憲一氏のご教示による。

②藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

③小山憲一氏のご教示による。

④三重県埋蔵文化財センター「土器の変遷～土師器皿について～」（『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』、1996年）。

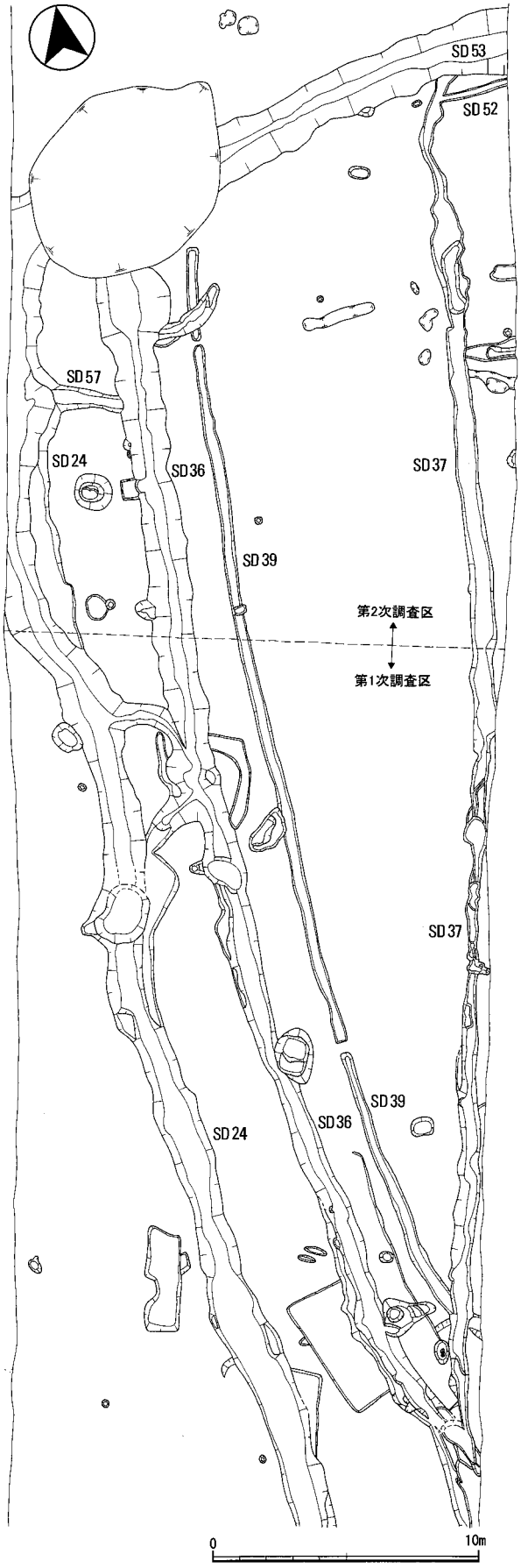
⑤『丁長遺跡発掘調査速報(現説資料)』（三重県埋蔵文化財センター、2006年）。

⑥伊藤裕偉「斎宮寮・伊勢道・条里」（『斎宮歴史博物館　研究紀要』13、2004年）。
伊藤裕偉「斎宮の成立」（『明和町史』斎宮編、2005年）。

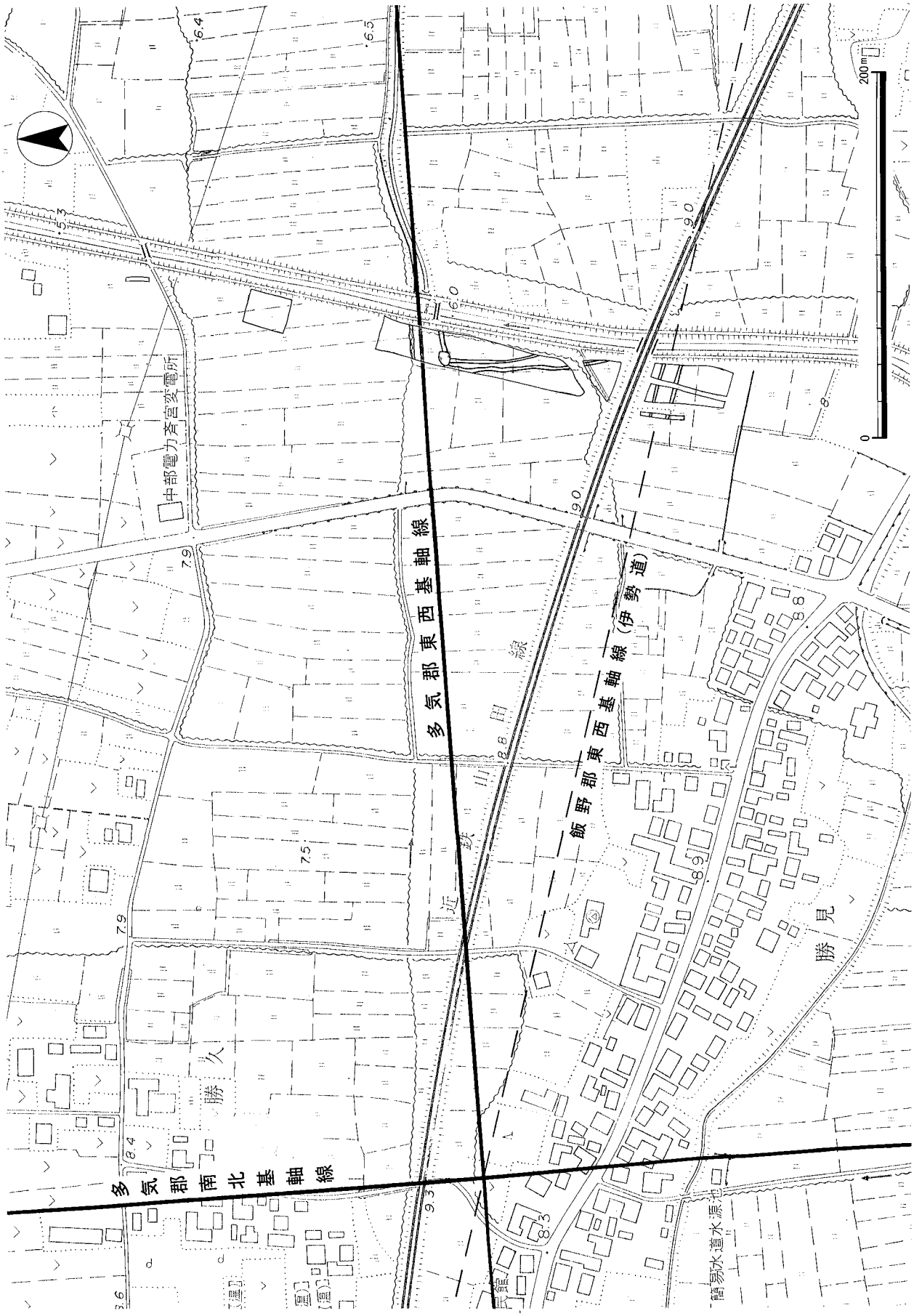
⑦『農村基盤総合整備事業（斉明地区）』№２（明和町、1975年）より作成。
第１次調査区検出の古代の溝は、伊藤裕偉氏によって想定された飯野郡東西基軸線の延長に重なる（註③・⑤より）。

⑧前掲⑥文献。

⑨明和町史編さん委員会編「講」（『明和町史』史料編第１巻　民俗・文化財、2004年）。



第21図　第１次・第２次調査検出溝群平面図（１：250）



第22図　丁長遺跡検出溝群と条里の関係（１：3,000）

写　真　図　版

調査前風景（北から・奥は第 1 次調査区）

Ⅰ区全景（北から）

写真図版２

Ⅰ区南半部（北から）

ＳＥ51半裁状況（南から）

Ⅱ区全景（南から・右は笹笛川）

ＳＤ62（北東から）

写真図版４

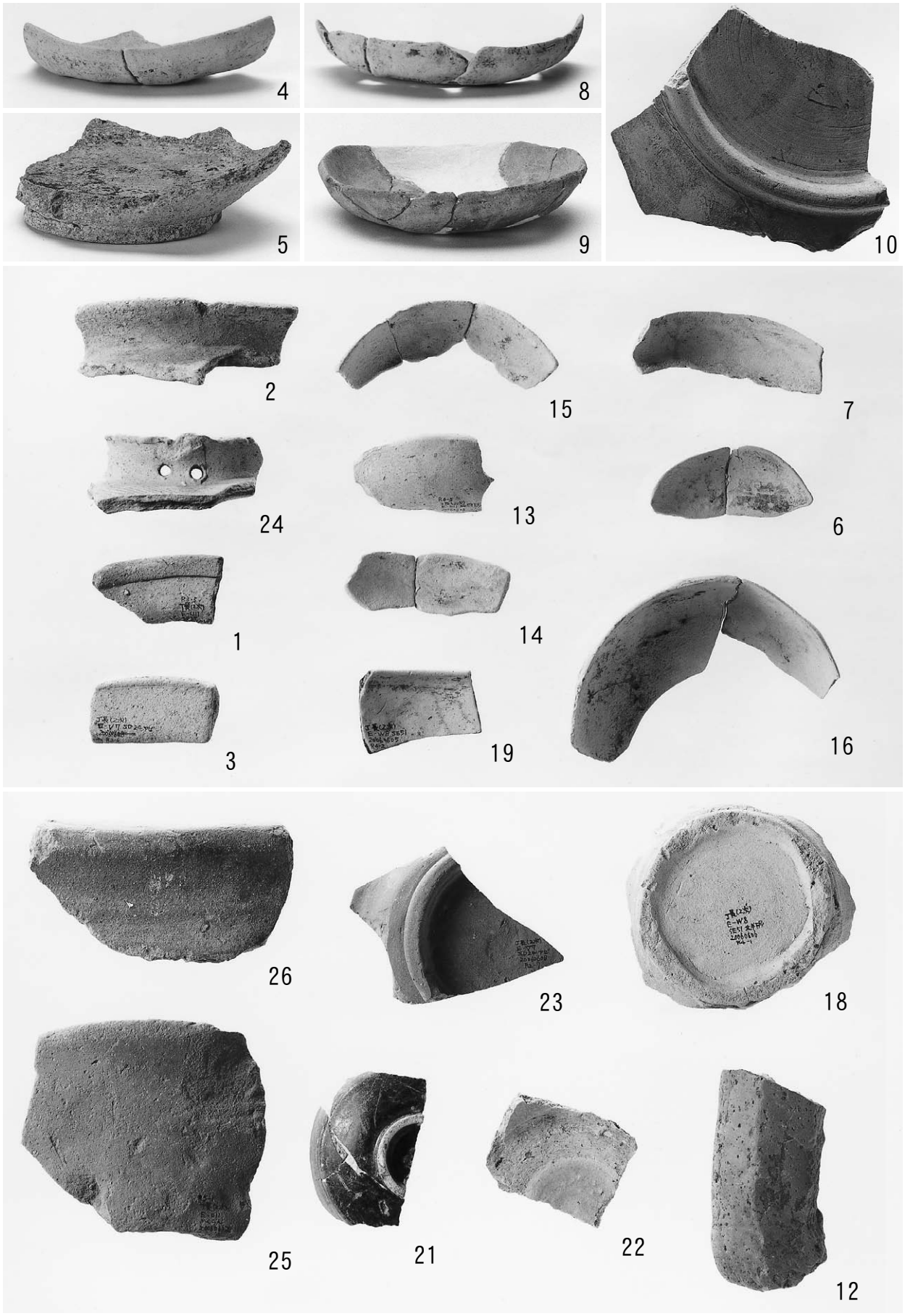
ＳＥ60木札出土状況（東から）

ＳＥ60井戸側検出状況（北東から）

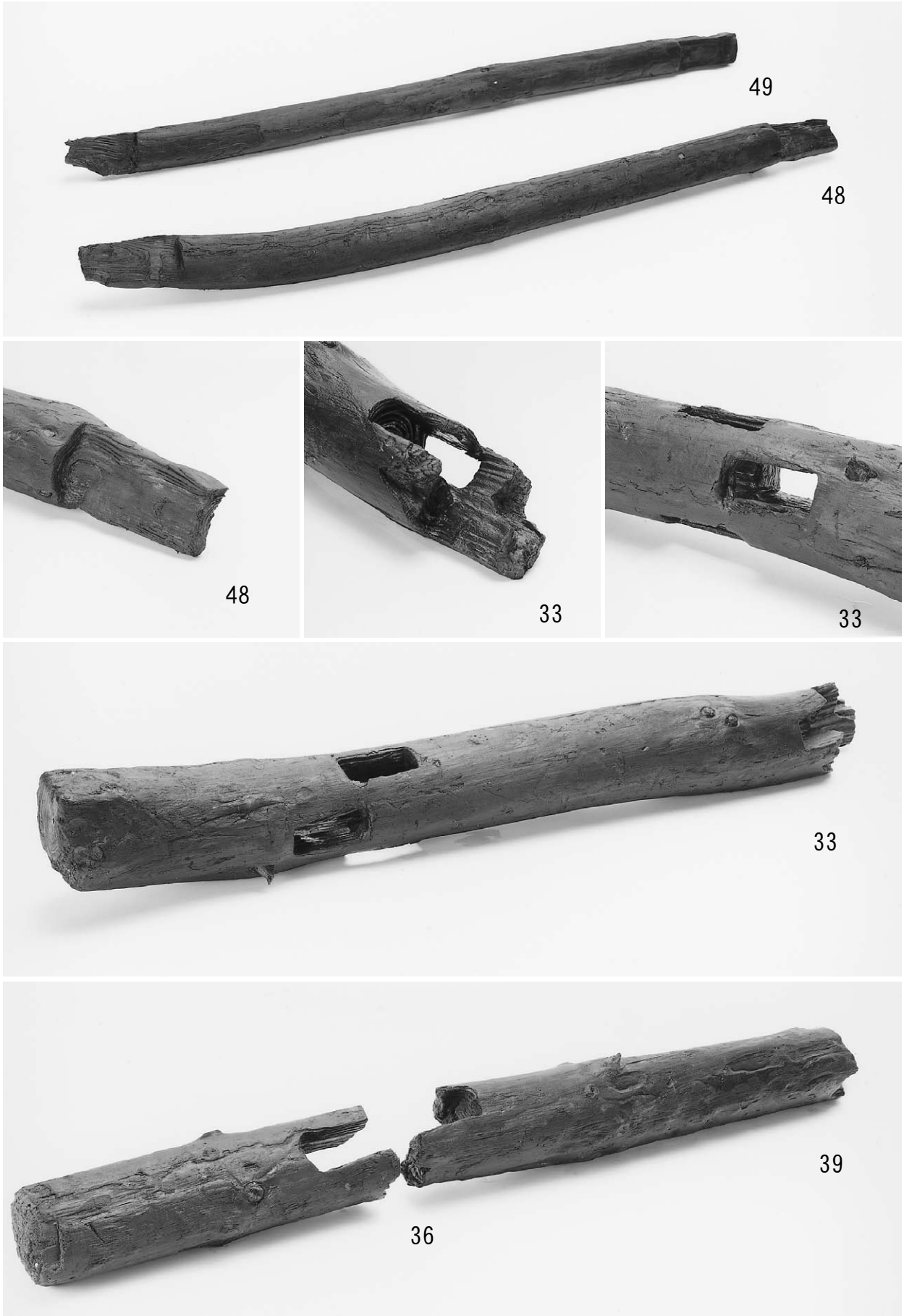
作業風景（Ⅰ区北から）

調査終了後状況（南西から）

写真図版 6



出土遺物写真



ＳＥ60出土遺物写真①

写真図版８

41

42

57上

57中

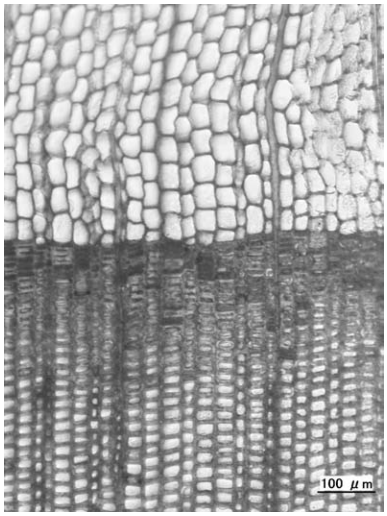
ＳＥ60出土遺物写真②（57は斜光写真）

57下

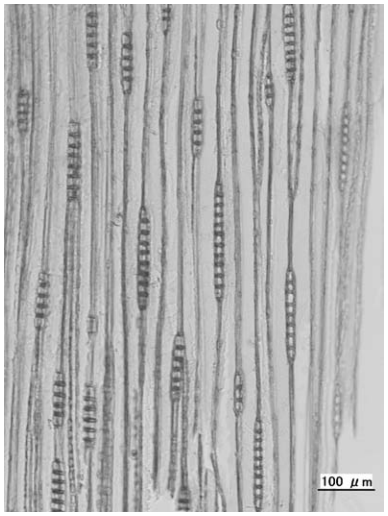
57表

57裏

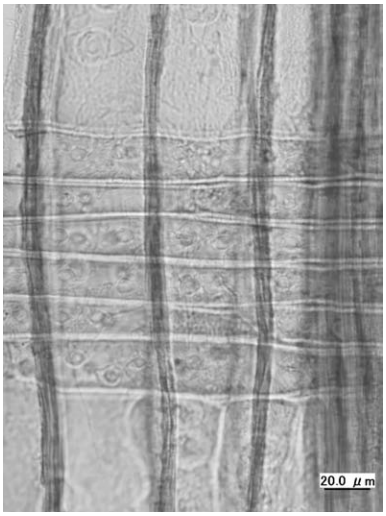
ＳＥ60出土遺物写真③（57下は斜光、57表裏は赤外線写真）



横断面



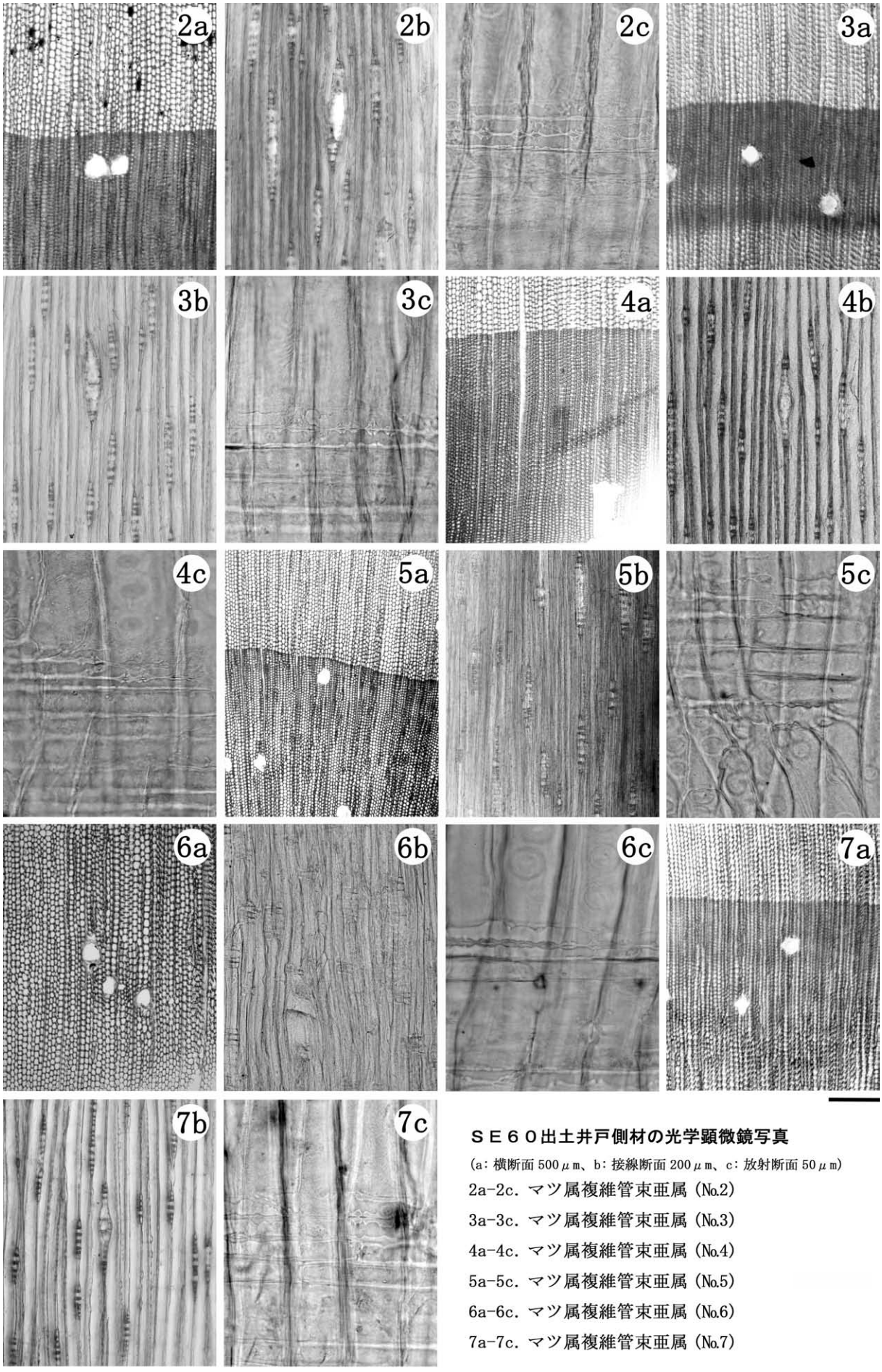
接線断面



放射断面

ＳＥ60出土木札の光学顕微鏡写真

写真図版10



ＳＥ６０出土井戸側材の光学顕微鏡写真

(a: 横断面 500μm、b: 接線断面 200μm、c: 放射断面 50μm)

2a-2c. マツ属複維管束亜属 (No.2)

3a-3c. マツ属複維管束亜属 (No.3)

4a-4c. マツ属複維管束亜属 (No.4)

5a-5c. マツ属複維管束亜属 (No.5)

6a-6c. マツ属複維管束亜属 (No.6)

7a-7c. マツ属複維管束亜属 (No.7)

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちょながいせき（だい２じ）はっくつちょうさほうこく
書名	丁長遺跡（第２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２９０－２
編著者名	野嶌美沙子・小林俊之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡０５９６－５２－１７３２
発行年月日	西暦　２００７年　１２月　２８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ちょながいせき 丁長遺跡	たきぐんめい 多気郡明 わちょうさいくう 和町斎宮 あざちょなが 字丁長 ・かみよこた ・上横田	442	745	34° 32′ 28″	136° 38′ 8″	2006.05.16～ 2006.07.24	1,400	平成18年度 総合河川流域 防災事業 二級河川笹笛川

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丁長遺跡	集落跡	中世 近世	溝・井戸・土坑 井戸 など	土師器、陶器、石器、 木札など 出土遺物重量 17.6kg	

要約

丁長遺跡は、中世から近世の遺跡である。第１次調査で確認された南北に延びる中世の溝の延長部分を確認した。また、中世および近世の井戸を確認し、近世の井戸からは大峯講と関係のある木札が出土した。しかし、全体的に出土遺物は少なく、遺構の詳細な時期決定は難しいものが多い。

三重県埋蔵文化財調査報告２９０−2

丁長遺跡（第２次）発掘調査報告

～三重県明和町斎宮所在～

２００７年１２月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　㈲山文印刷